
クロス

ナオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス

【Nコード】

N0395Z

【作者名】

ナオ

【あらすじ】

少女には、決して誰にも知られたくない秘密があった。首に掛かるクロスだけが知る、忌まわしい過去。癒すことのできない心の傷を抱えた愛美は、優しい実の兄に禁断の想いを寄せるようになる。

小説サイト『Berry's Cafe』に掲載、完結した作品と同じものです。

母から兄の名を久しぶりに聞いたのは、六年生の夏だった。

「だからね、あんたはそこに行っても一人じゃないのよ。施設には他にも親のいない子どもが沢山いるの。今の世の中、別に珍しいことじゃないでしょ？ 父親が違ってても兄さんがいるんだから他の子よりましだと思わなきゃ」

古びたアパートの部屋の畳に座り、ひんやりした壁に背をつけて膝を抱えた私の裸足のつま先を、ガラス窓から差し込む沈みかけた太陽の濃い朱色が染めている。

夏の太陽のその強すぎる赤は、鏡に向かう母がいつも指でさす口紅の色に似ていた。

「お母さんは迎えに来てくれる？」

朱色の光から逃れようと抱えた膝を引きつけたが、こここのところ急に膨らみを増した胸が邪魔をする。

この頃では同じクラス男子だけではなく、もっと大きな学生や大人の男の人までが私の顔と胸に視線をとめるようになり、それが恥ずかしくて嫌でたまらなかった。

「それはね、あんた次第よ」

母は化粧を終えると、レースのついたスリップの上に花柄の薄いワンピースをはおり、ほっそりした身体に似合わないほど豊かな胸を強調するように、胸元の開きを両手でぐっと引き下げた。

鏡の中の自分を熱心に見つめたまま、明るい色の茶色い長い髪を少し乱暴に梳かす。

「あんたが母さんの幸せを願えるいい子になればね。嘘つきを直すいい機会よ」

母は手を止め、鏡の中から一瞬私を見つめた。

こんな時の母の目は、私をいつも落ち着かない気持ちにさせる。母の冷たい視線が耐え切れず、私は言葉もなくうつむいた。

狭い玄関で、手早に細くて高いヒールのサンダルを履いた母は、振り返らずに私に言った。

「いい？ 誰が来てもドアを開けちゃだめよ。お母さんは留守だからって言いなさい。わかったわね？」

「はい」

早く帰って来てねという言葉が無理やり飲み込む。

錆び付いたドアが閉まり、私は夕暮れの部屋にひとり取り残された。

幼い頃から繰り返された日常。

母が出て行った後、私は家の鍵を閉め、小さな折りたたみのテーブルに向かって算数の宿題を始めた。

窓の外からは、男女がお互いをからかう笑い声が聞こえている。

私は立ち上がり、人が行きかい始めた路地側のカーテンを閉めた。

私は夜のこの街が好きではない。

クラスの子の一部には大きな少女のように繁華街に遊びに出

る子もいたが、私はそうしたことにはなかった。

暗闇に輝くネオンは、なぜか私を不安な気持ちにさせる。

母は私が遊び歩くことや、言葉遣いを乱暴にすることを好まないのも知っていた。

「私と同じになるんなら、ここから出て行きなさい。自分の最低な人生を繰り返し見せられるのはごめんよ」

こうして一人で計算問題を解いているのが好きだった。その時は何にも考えずにいられるから。

あたりがずいぶん暗くなってきたことに気付いたのは、それからしばらく経った頃だ。

台所に置いてある菓子パンを食べようと教科書を閉じた時、ドアをノックする音が聞こえた。

心臓が大きく鳴り、身体が強張る。

手が冷たくなっているのがわかった。

「愛美！」

ドアの外から男の声が聞こえる。

私は狭い部屋の隅に身体を屈めてうずくまり、両手で強く耳を塞いだ。

もっと早く明かりを消していればよかった。

眠っていたと言えたのに。

耳を塞いでいても聞こえるほど、ドアを叩く音が大きくなってくる。

隣の部屋の女の人が「うるさいから何とかしな！」と、壁に物を投げつけて怒鳴り声を上げた。

私はやっと立ち上がると、ドアの内側から母の恋人に言った。
身体が震えている。

「母は仕事に行きました。だからまた明日来て下さい」

「酔っ払ってふらついてんだよ。水を一杯飲ませてくれたらすぐ帰るからさ」

「でも、お母さんが誰も入れちゃいけないって……」

「知らない奴をつてことだろ？ 俺とお前のお袋の仲なら、お前の親父みたいなもんじゃねえか。身内だぜ？ 身内」

言葉を返せずいたら、男は急に声を荒立て、ドアを力任せに蹴り始めた。

「愛美！ 俺を邪険に扱ったってお前のお袋に言いつけるぞ！ いいんだな！」

これ以上ドアを開けることを拒んだら、何があつたか近所の人の口から母に知れてしまう。

私は震える手でドアを開けた。

「最初から素直に言うことを聞けよ」

母の若い恋人は、なだめたり怒鳴ったりするいつもの手段で部屋に上がり込んだ。

かすかに漂うアルコールの匂いで吐きそうになり、手で口を押さえる。

男は少し前からこうして母が留守の時に部屋に上がり込むようになった。

最初の頃は勉強する私の後ろから肩に触れたりする程度だったが、その行為は回を増すごとにエスカレートしていく。

この前は後ろから抱きつかれ、服の上から痛くなるほど胸を触られた。

たまたま気分が悪くなっていたのもより早く帰ってきた母がアパートのドアを開けた時、男の手は私のＴシャツとスカートの中を執拗に弄っていて、それを見つけて取り乱した母はヒステリックに泣いて私の頬を打ちつけた。

「こいつが誘ったんだ。ガキのくせに娼婦みたいな目で。末恐ろしい女だぜ」

母よりいくつも年若い恋人はそう言い、否定する私を嘘つきと母は罵った。

「その年で母親の男を寝取ろうとするなんて！ あんたは自分が綺麗だとも思ってるの？ あんたみたいな嘘つきは、その汚い心が全部顔に出てるのよ。いい？ あんたは誰よりも醜いってことを覚えておきなさい」

母が叫ぶ声が耳に木霊する。

母は付き合っている男達にいつも強く独占的な愛情を求めた。

相手の心を全て手にしないと不安に取りつかれ、眠れなくなってしまうのだ。

そして、相手に愛情がなくなったと知るや、その強い愛と同じ分だけ憎悪する。

夜一人で泣いている母の姿を何度も見た。

幼い私は、母のその震える細い背中が、ただ哀しくてたまらなかった。

「愛美。布団を敷けと言ってる。早くしろよ！」

立ちすくんだまま動けない私に強い口調で命令すると、男はデニムのポケットからライターを取り出して、イラついたように煙草に火をつけた。

体を屈めるようにライターを何度もカチカチといわせて。

黒いタンクトップから覗く胸に、蛇の絡まった銀の十字架が掛かっている。

私には、そのクロスが母の人生のように見えた。

私は男の目から逃れるように背を向け、押し入れから布団を出して色あせた畳の上に敷いた。

母の恋人が怒ってここから去ってしまったらという不安で頭が一杯だった。

すぐに男が私に抱きつき、身体をまさぐり始める。

男に服をはぎ取られているときも、薄い布団の上に押し倒された時も、私は声を上げなかった。

01-1 (後書き)

ラストまで、できるかぎり日々更新していくつもりです。よろしく
お願いします。

顔をそらす私の顎を乱暴に掴み、男がまっすぐに目を見つめながら低く掠れた声で言った。

「瞼を閉じるな。最後まで俺を見てろ……。これからお前が俺にされることを、しっかりと記憶に刻みつけておけ」

まだ昼の暑さがけだるく残る部屋の中で、母の恋人は私を執拗に抱いた。

初めての痛みにさいなまれる時間がのろのろと過ぎていく。冷めない悪夢にいるのだと思うことすら許されなかった。

男が乱れる私の髪を掴み、この行為が現実であると知らしめる。

かなわぬ力で拘束されている間、私は一つ違いの優しい兄のことをぼんやりと考えていた。

最後に会ったのはいつのことだっただろう。

兄は今、どうしているのか。

私を思い出してくれることがあるだろうか。

兄と手を繋ぎ、二人で体を寄せ合って眠った小さな頃の記憶に心を預けた。

誰よりも私を愛してくれた兄。

兄と私は父親が違う。

兄の父は日本名を持つ混血の南米人で、母と知り合った時には有名なサッカークラブに所属する選手だった。

母は当時働いていたバーで来日していた兄の父と知り合い、後を追うようにかの地へ渡って兄を産んだ。

兄の父親と母は不思議な関係にある。

入れ替わり立ち代り男が出入りする中で、兄の父だけが母の人生に深く絡みついていた。

母もまた日本とフランスの混血で、早くに父を、そしてその後に母を亡くしていた。

貧しい環境に育だち、天涯孤独の身の上だったのは兄の父も同じだ。

同じ境遇の二人はお互いに共有しあえる特別な感情があったのかもしれない。

兄を産んだ一年後、母は日本から南米へ赴いていたジャーナリストとの間に子どもを身ごもり、日本に戻って私を産んだ。

母は肌色に父親の面影を残す小さな兄を施設に捨てたが、結局私の父とは一緒になることはなく、私の記憶に父親の姿はない。

母は兄の父親と時々縁りを戻してはしばらく一緒に暮らした。

傷害事件を起こして足に大きな怪我を負い、選手生命を失った兄の父が、仕事を探して日本に来ていたからだ。

移り気なマスコミから仕事をもらえたのは、ごく初期の頃だけだった。

もともと激しい気性で行動に問題があった兄の父は、成功していたときのプライドを捨てられず、荒れて暴力事件を起こしてはそのたびに追いつめられていった。

結局仕事にも日本にもとけ込めないまま都会の片隅で埋もれるように暮らし、自堕落な生活を送りながら母の稼ぎを当てにするようになる。

そして、二人が家庭のまねごとをする間だけ、兄は施設から呼び出され、家に引き取られるのだ。

兄の父親は大きくて怖い人だったという記憶しかない。

足を思うように動かせない苛立ちは、すべて母と小さな兄への暴力に変わる。

自分が置かれた状況への怒りが、母への猜疑心や嫉妬心になったのだ。

母の勤め先に押しかけ、客にすら暴力を振るう。

母だけに頼る生活は、そうしてますます苦しさを増した。

繰り返される暴力と二人の言い争い。

母は父との争いを、父親の血を濃く引いた兄を愛さないことで報復した。

それが、肉体への暴力以上に兄の心を傷つけた。

それでも兄は父と母を慕っていた。

機嫌のよい時は熱心にサッカーを教えしてくれる強く大きな父と、ふと母親らしい態度を見せる誰よりも美しい母。

気まぐれに愛と暴力を繰り返す事が子どもにとってどれほど残酷な仕打ちであることが。

いつそ暴力だけならいい。

兄には親を憎む逃げ道すら与えられなかったのだ。

誰にも見られないように布団の中で泣いていた兄の姿を思い出すと、今でも身を切られるように切なくなる。

兄を慰めてあげたかった。

けれど幼い私にできるのは、ただ背中を丸めて嗚咽している兄に寄り添って一緒に眠ることだけだった。

誰よりも心優しい兄を幸せにしてあげられたら。

まるで心を持たない人形を気まぐれにゴミ箱に投げ込むように、実の親から何度も捨てられた兄。

いつか自分を愛してくれるのではと願う彼の気持ちは、その度無惨に打ち砕かれ、母は兄の存在を記憶のあなたに押しやった。

首に銀のクロスを掛けたこの独裁的な母の若い恋人は、私の中で兄の父と重なる。

「今日はこれでやめてやるよ。風呂場で身体を流して来い」

行為を終えると、母の恋人は私をまだ組み敷いたままそう言った。男の顎を伝った汗が私の目に落ち、その痛みに驚く。男の汗は、私の目から涙のように頬に流れ落ちた。

男はようやく私を離し、そのまま身体をずらしてすぐに煙草に火をつけた。

「このシーツはあいつに見つからないように捨てておけ。いいな？」

「……はい」

白いシーツに残る鮮血の跡が何を意味するのかさえ、よくわかっていなかった。

身体を中心に焼け付くような痛みを感じながらやっと立ち上がり、歩き出そうとした途端、驚いて足を止めた。

身体の中から流れた何かがどろりと太ももを伝う。

男は布団にうつ伏せで腕をつき、震える私を肩越しに振り返って低く笑った。

「今度からはちゃんと気をつけてやるよ。それはお前に俺を刻み付けた証だ」

母の恋人の私への行為は、一晩では終わらなかった。

その夜からお腹の鈍い痛みがなかなか癒えず、私は母の恋人が来

る度にそう訴えたが、男は行為を何回も繰り返せば治っていくのだと言って一層執拗に求めてくる。

最初の言葉通り、行為中に私が目を閉じることを、男は決して許さなかった。

男が私の目を見つめ、低い声で言う。

「お前の目に、俺が映っている。汚されて憎いだろう？ 俺を憎め、愛美……」

まるで、何か見えない影に追われているかのように、男は私を抱きたがった。

母が家から出るの見計らうと、夜も更けないうちから頻繁にドアを叩く。

母の留守を待ちきれず、学校の帰りに待ち伏せられて知らない場所に連れ込まれることもあった。

母と三人で家にいる時には息が詰まりそうな緊張で食事が一口も喉を通らない。

母が席を外したほんの数分の間すら、男は私に手を伸ばすのだった。

「あいつに言うんじゃないぞ。バレたらあいつは泣くし、俺は金が入らなくなる。お前のせいで皆を不幸にするのは嫌だろ？」

母に訴える事など、考えたこともなかった。

それどころか、知らなければいいと必死で願う。

母が私と恋人の関係を知ってしまえば、その時私は捨てられてしまふのがわかっていたからだ。

今の恋人ができてから、母は私を施設に入れることを頻繁に口に出すようになっていた。

始めて母が恋人をアパートに連れて来た時、男はいつまでも私を見るのをやめず、母とそのことで口論しているのを聞いたことがある。

「あの子に絶対に手を出さないで」

隣の部屋から母が恋人にそう言っているのが聞こえた。

「焼いてるのか。俺はガキなんか興味ねえよ。お前にそっくりでつい見とれただけさ」

「もし手を付けたら許さない」

「俺を？ それともお前の娘をか？」

男が低く笑ってそう言い、二人の会話が途切れていく。

「……俺と別れられるのか」

「施設に入れようと思ってるのよ……」

母が途切れ途切れに男に言う声が聞こえる。

「愛美はお前の娘だろ……。ここにおいて置けよ。な？ 俺はもうあいつを自分の娘みたいに思ってたんだよ……。俺が欲しい女はお前

ただだ。わかるだろ……」

私は布団をかぶり、隣の部屋から漏れる声から耳を塞いだ。幼い頃から繰り返し聞きかされてきたその声は、どれだけたっても慣れることなどできなかつた。

男の行動は日々大胆になっていき、私への行為は日常的になった。私は母に秘密を知られたらと怯え、学校では同じ年の少女達と無邪気に話すことができなくなっていた。

私は皆と違ってしまったのだ。私が汚れていることを誰もが見透かしている気がして、顔を上げて目を合わせるのが怖い。

小さなクスクス笑いや内緒話が聞こえると、私の秘密を噂されているような気がして身体が凍りつく。

どこにいても不安で落ち着かず、自分の居場所がない気がした。自分に苦しみを与える男から逃げることにすら思いつかなかった。ただ自分を消し去ってしまいたいという想いだけが日々募っていく。

男はある日、いつものように私を抱いた後、自分の首にかけた銀色のクロスをとり、裸のままの私の首につけて言った。

「外すなよ。これはお前の烙印だ。どこにいてもこのクロスから逃れられない。お前はこの先もずっと俺を思い出し続けるんだ。たとえ俺が死んでもな……」

四カ月後、私は学校で高熱を出して倒れ、病院に運ばれた。

私は小さな頃から傷や風邪の治りが遅く、微熱が続いてはよく学校を休んだ。

免疫機能に少し問題があるとわかったのはその時だ。

身体のだこの傷から発生している熱なのかを医者が母に説明した時、母はベッドに横たわる私を冷ややかに燃える目で見つめていた。

「そのクロスはお前が私を裏切った証よ」

母はそう言い捨て、私から目を背けた。

退院後、母が施設の近くまで私を連れて行き、「ここからは一人で歩いていくのよ。母がもうずっと家に戻りませんって出てきた大人に言えばそれですむから」と言った時にも、私はただその言葉に頷いただけだった。

白いワンピースを纏った母の後姿の記憶は、実感のない幻のようだ。

これはただの夢で、いつか目を覚ますことができるのだと、そう信じていたかったのかも知れない。

施設の事務所の中で大人たちが眉をひそめて私の処遇を話し合っている間、廊下に出されて小さな窓から見える殺風景な外の景色を眺めていたら、背の高い浅黒い肌をした少年が歩いてきて、戸惑ったように私を見つめた。

「愛美……?」

記憶にあるよりずっと低い、優しいハスキーボイス。

「どっつてここに」

数年の時を経て、兄が私を見間違える事はなかった。

兄の聡明な黒い瞳を見た途端、安堵のあまり涙がどっと溢れ、私は声を上げて泣き出した。

「陸人……陸人……」

兄の名を繰り返し呼びながら、ほっそりした身体にしがみ付いて泣き続けた。

暗く冷たい施設の廊下にいることすら忘れるほど、陸人が私の身体に回してくれた手は暖かった。

それから数週間がたった時、男が刺されて死んだことを、誰かが見ていたテレビのニュースで知った。

大量の麻薬が関係した事件だということだった。

私の首にかかるクロスを外してくれる男はもうこの世にいない。

そして、死すらクロスから自分を解き放ってはくれないことを、その時私ははつきりと知ったのだ。

施設は日向園といい、私や陸人と似たような境遇の子どもたちが集まっている、街外れの古く殺風景なコンクリートの建物だった。未就学児童から高校生までが全部で二十五人収容されている小さな施設だ。

錆びた鉄の門を通過して中央玄関に入ると中央に管制室と食堂があり、その両側が女子寮と男子寮に分かれていた。

男子が十六人に対し女子が九人だったので、女子寮の方には少し余裕があり、一部屋が一人か二人に割り当てられている。

管制室からはそれぞれの棟へ細い廊下で繋がっており、監視が行き届いてさえいれば、男女は玄関での出入りと食事以外で顔を会わせることはないはずだった。

園長、副園長のほかに指導者が名目上は四人いるが、最年長の少年達の素行に恐れをなした職員の退職が相次いでいて、施設は常に手不足状態にある。

施設内は、世間での評判以上に荒れていた。

食堂には当たり前のように灰皿が置かれ、窓ガラスは常にどこかが割られている。

ほとんど面会者が訪れることのない施設で、子ども達の心は荒れ、行き場のない怒りに満ちていた。

年長の少年は不登校が多く、彼らの間には常に暴力行為を含む諍いが起こっていて、それを制止する力を持つものがいなかった。

他の施設がどのようなものかは知らない。

子ども達が心から安心できる環境の施設もあるのだろう。けれど、私が知っているのはこの日向園だけで、ここではそれが日常だった。

おそらく、私が置かれていたのは誰が見ても劣悪な環境だったのだと思う。

それは、自分がどこに住んでいるかを話した時の回りの反応でもわかる。

そんな状態であっても、私は施設での暮らしを辛いと思うことはなかった。

毎日決まった時間に食事が摂れ、ベッドで眠れる。

もともと豊かな生活を知らなかったこともあるが、何日も一人になつたり、男がドアを叩く音に怯えずにいられるのが幸せですらあった。

そして何より、そこには陸人がいた。

日向園で暮らすようになってから四ヶ月が過ぎ、私はもうすぐ中学一年、陸人は二年になる春を迎えていた。

施設の狭い庭には細い桜の木がほんのりと色づいた花を咲かせている。

まだ少し風は冷たいが、日差しの暖かな日だった。

陸人がブロック塀に寄りかかるように立っている私の顔を覗き込むようにして聞いた。

「誰かお前に手を出してくる奴はいないよな？」

唇の端にはまた新しい傷ができている。

常に私の身边に気を配っている彼の身体から、この四ヶ月間生傷

が耐えたことはなかった。

力のある者がここでの権力を持つ。

私が施設に入ってしばらくしてから、下校の途中で施設の少年に待ち伏せされ、絡まれたことがあった。

陸人が初めて身体に争いの傷をつけて来たのは、その夜のことだ。数日経つと、食事の時、他の少年が陸人の回りの席を遠慮がちに空けるようになった。

陸人より年長の少年達でさえ。

以来私は手出しをされるどころか、少年たちと目が合うことすら稀になった。

陸人は年長の少年に負けない程の体格と敏捷さを持っていたが、どうやって私を守っているのかは決して口に出さなかった。

私が来てから陸人は別人のように変わってしまったと、同い年の少女が口に出したことがある。

だが、優しく穏やかな兄の姿しか見たことがない私は、他の人が彼をそれほど恐れる理由を、どうしても納得することができなかった。

「大丈夫。全然怖いことはないわ」

他の少年たちに、部屋の鍵をかけずにいることを強要されている少女がいることも、陸人の庇護の下に置かれた私は知らないでいた。

「もし誰かに少しでも何かされたら隠さずに言うんだよ。いいね？」

「うん……」

陸人は厳しい表情を緩め、ようやくいつもの優しい笑顔を見せた。

「ごめん。怖がらせたね。そんな顔するなよ。愛美は可愛いんだから、もう少し笑ったほうがいい」

私を喜ばせようと、陸人がいつもの様にサッカーボールを手に持っている。

陸人がサッカーボールを使って遊んでいるのを見ているのが好きだった。

まるでマジックのようにボールを操り、いつも驚くような曲芸を見せてくれる。

「私、可愛くなんかない」

私は母の言葉を思い出し、小さな声でそう言った。

誰にも自分の顔を見られなくなかった。

私は嘘つきだ。

病院で母に、誰に抱かれていたのかと問い詰められた時も、最後まで母の知らない男だと答えた。

そうして私はいくつもの嘘を重ねる。

「違う。愛美は綺麗だよ。綺麗過ぎるんだ。それを知っていなきゃならない」

真剣な声で陸人は言った。

「愛美にはまだわからないことだけど、自分の外見が最低の奴らを卑劣な行動に駆り立たせることがあるって覚えておくんだ。ここにいるといつもその危険に晒されるし、これからはもっとそうになってく。愛美をあいつらの手で汚したくない」

私はその言葉に曖昧に頷いた。

陸人は私がもうどれほど汚れているかを知らない。

母の恋人に行為を繰り返されていくに連れ、最初に感じていた痛みは徐々になくなっていった。

初めての時、男が言った通りに。

身体を支配する感覚は違うものになりかけていたのだ。

男が生きていてあの関係が続いていたら、私はどうなってしまったのだろう。

その記憶が今も私を苦しめる。

お前はもつと自分の身体が変わっていくのを知るんだ。そのうち心も身体に支配される。あいつの娘だから、その血が流れてるのさ。

男はそう言って皮肉に笑った。

私はどんどん穢れていくのだ。

こっしている間にも、何か恐ろしいものが身体を蝕んでいく気がする。

恐怖で身体が強張った。

ふと気がつくとき陸人が私の顔を見つめていた。

「大丈夫だよ、愛美。俺が絶対に守ってやる」

力づけるように、陸人はそう言った。

それからいつものように指先で器用にボールをくるくる回すと、それをひょいっと後ろに投げて踵で蹴り上げる。

「さて、ボールはどこでしょう」

陸人は悪戯っぽい表情で私を見ると両手を前に突き出した。
ボールは影も形もない。

「すごい。どこ？」

驚いて見ている私にくるっと背を向けると、陸人は背中のＴシャツの中にぽっこり膨らんで収まっているボールを見せた。
ボールで膨らんだＴシャツにはマジックでおかしな顔が描いてあって、陸人が動くとも顔も笑っているみたいに見える。

「やだ。おかしい」

思わず吹き出して笑ったら、そのまま腹話術みたいにボールがしゃべった。

「誕生日おめでとう。愛美」

それから陸人はこつちを振り返り、ポケットから熊みたいふわふわした白い犬の縫いぐるみを出して私に手渡した。首に赤いリボンを結んでいる。

「ほら。欲しかったんだろ？」

「そうなの！ 可愛い……。けどこれ、ドーナツショップの景品でしょ？ どうやって」

「盗んだんじゃないぜ。学校の帰りに毎日店の前で落ちてるカードを探したんだよ。景品引き換えの期間が終わるまでに点数が集まるかひやひやした」

「そうだったの。ありがとう……」

涙が込み上げて、目の前の陸人が霞んで見える。母と暮らしていた頃は、泣く事をいつも我慢していた。

私が泣くと母は途端に機嫌が悪くなり、ただでさえ疲れているのにこれ以上辛気臭い顔を見せられるのはうんざりだと声を張り上げる。

私は母の機嫌を損ねないように、迷惑をかけないように、感情を押し殺し、息をひそめて日々を過ごしていたのだ。

「今日の愛美の涙用のハンカチ。洗濯済み」

陸人はそう言って、いつものように私にハンカチを差し出した。

「アイロンまでかけてある」

「誕生日だから特別仕様だよ。家庭科の時間にしっかりかけといたんだ」

私が泣き笑いすると、陸人は笑ってそう言った。

陸人の前では泣くことに怯えずにすむから、私はいつの間にかすっかり泣き虫になってしまったようだ。

暖かく、優しい兄。

施設内での恐ろしい噂など、どうして信じられるだろう。

私は兄の聡明な黒い瞳を見つめていた。

春の風に、陸人の黒髪が揺れている。

「なんだよ。寝癖でもついでる？」

陸人にそう言われて、自分が知らずに兄の髪に手を伸ばして触れていたことに気がついた。

「桜の花びら」

私は動揺した心を押し隠すように、陸人の髪から桜の花びらを取って手のひらに乗せるとそれを見せた。

こうして一緒にいると、いつも不思議な感覚で胸が締め付けられる。

それがいったい何なのか、その時の私にはまだわからずにいた。

「綺麗ね」

「愛美に似合うよ。愛美ほど綺麗な子は、どこにもいない」

陸人は私を真っ直ぐに見つめてそう言った。

私の手から花びらをそっと取ると、それを私の頭に置いて微笑む。

陸人といると、自分の中にある汚れたものが全て流れ出して行くように思えるのだ。

この荒れた施設の中で一番の力を持つ少年は、私の前では小さな時から変わらぬ優しい兄だ。

もし幸せな家庭があったなら、陸人はきっと穏やかで幸せな一生を送れたはずなのに。

陸人は少し高めのコンクリートの塀に簡単に登ると、私の手を引き上げて一緒に塀の上に乗せてくれた。

川原のずっと向こうの高台にある高校が、緑の木々の間から煉瓦の頭を覗かせているのが見える。

「あそこに見える高校のサッカー部は昔すごく強かったんだ。このボールはその部員の人達が寄せ書きしてくれたものなんだよ。もう何年も前だけどね」

陸人は私にそう言って懐かしそうに遠くを見つめた。

「高校はあそこに行くの？」

私が聞くと陸人は横に首を振った。

「たぶん華南だと思う。華南の中等部からサッカー部に入らないかって誘われてるから、そこに行こうと思うんだ……。この辺では最高レベルのサッカー部だからね」

「華南ってどこにあるの？」

「街の中心だよ」

「ずいぶん遠いね。通うの大変そう」

陸人は扉に腰掛け、私を横に座らせるとしばらく黙って考え込み、ようやく口を開いた。

「愛美。俺、四月から華南の寮に入るよ。サッカー部に入るにはそれが条件だって言われた」

「ここを出るってこと……？」

シヨックですぐに言葉を返せなかった。

陸人と離れることなど考えられない。

「愛美。落ち着いて聞いて」

陸人は私の肩を抱いて、一言一言言い聞かせるように落ち着いた声でゆっくり話し出した。

「こんな所を早く出なくちゃいけない。愛美をここにいさせたくない。俺らみたいな育ちの奴がその先どんな暮らしをするようになるか、今までずっと見てきた。

サッカーで少しでも早く稼ぐようになりたいんだ。サッカーは実力が全ての世界だから、プロのスカウトも常に注目するような有名校で名を上げる必要があるんだよ」

確かに陸人が持っているサッカーの才能は稀有なものだ。

地元の中学へ通っている今ですら、その突出した才能が話題を集めていた。

何度か応援に行った試合でも、みんなが息を飲んで陸人を見つめていた。

誰よりも足が速く、楽々とボールを操り、大胆で正確なシュートを決める。

陸人は、間違いなく特別なものを持って生まれている。

それだけが、彼の父が陸人に与えた唯一の贈り物だった。

「陸人と離れるなんていや。このままでいいの。陸人と一緒にいれるならここがいい」

「何言ってるんだ。ここがどんな所だかわかってるだろ？ 俺だけならいい。でも、愛美はもっと幸せな家庭に暮らすべきなんだ。親がそれを与えてくれないなら俺がきつとここから救い出す」

「怖い。お願い。どこにも行かないで」

私は陸人にしがみ付いたまま言った。

身体の震えが止まらない。

陸人がこの小さな世界から飛び出し、私のもとに永遠に戻ってきてくれない気がした。

陸人を失ってしまったら、私にはもう何も残らない。

「心配しないでいい。玖出に話をつけてる。あいつが俺が出た後この施設を取り仕切る。誰にも手出しはさせない」

ただ涙が流れて言葉を上手くつなげなかった。

陸人は気付いていないが、サッカー選手だった父親を今でも慕っ

てその影を追い続けているのがわかっていた。
陸人を止めてはいけないのだ。

「うん……」

私は頷いた。

「私、待ってる。陸人が迎えに来てくれるのを待ってるね……」

それからしばらくして陸人は華南に編入し、何年も暮らした日向園を後にした。

陸人が施設を出た後、玖出という陸人より一つ年上の少年が一番力を持つようになった。

この施設に入ってももうすぐ二年になるうとする彼は、まるで触れれば怪我をしてしまう、鋭利な刃物の様だ。

誰もが彼を恐れ、むやみに近寄るものはいなかったが、私は彼が嫌いではなかった。

玖出のほっそりした背の高い体つきは少し陸人に似ている。

陸人とは同じ部に所属していて、彼が陸人を認めていたのはその際立ったサッカーの才能によるところが大きかった。

不登校の少年が多い中、彼らが学校へ通い続けたのはそのためだ。彼らにとってサッカーは聖域で、それだけが救いのない彼らの人生の光だったのだ。

彼は陸人との約束通り、他の少年が私に手を出すことを決して許さなかった。

その当時施設の中で、私は一番安全な環境におかれていたと思う。

「今の中学には卒業までいるの？」

私は誰もいない施設の食堂で玖出の隣に座り、彼の横顔を見て言った。

金色に透けた長めの髪といくつかつけた銀のピアスが、驚くほど端正な顔によく似合っている。

玖出の髪や肌はもともと色素が薄い。

瞳の色も黒ではなく、透き通るグレーのガラスのようだ。

だが、彼が自分の美しい容姿を好まず、あえて髪を冷めた色に脱色しているのを知っていた。

自分の容姿を憎んでいるように感じることにすらある。

彼は私と同じように他国の血が混じっていて、そのせいか私達の顔立ちは不思議な程よく似ていた。

血の繋がった兄の陸人とはまったく似ていないと言われるのに、玖出といると兄妹が双子に間違えられる。

彼の左腕には大きな十字架の刺青があった。

家を飛び出す前に養父につけられたのだと言っていた。

私達は二人とも、逃れることのできないクロスを持っている。

「もう少しで卒業だから、それまで今の学校のサッカー部をやめたくない。昨日華南のスカウトから誘われたよ。このまま大きな問題を起こさなければ、高校からは華南でやれそうだ」

誰ともほとんど話をしない玖出は、私にだけこうして自分のことを話す。

私も、彼と二人でいる時だけ、ここが荒れた施設の中だということとを忘れた。

陸人がそうだったように、玖出もまた私の前では穏やかな表情しか見せたことがない。

「サッカーって楽しい？」

私が聞くと玖出は少し笑った。

「どうかな。生きてるって感じるよ。お前の兄貴もそうじゃないか？」

いつもは冷めた彼の顔に優しい笑顔が浮かぶ。

大人びて見える少年が、年相応に見える瞬間だ。

私は彼の笑顔を見ると心が温まり、陸人がいない寂しさを少しだけ紛らす事ができた。

「華南だと陸人と同じね。ずいぶん強いサッカー部だって聞いている」

「まあね。あそこに入ればプロへの道は近い。お前の兄貴は凄いや。あれ程の才能を持った奴を見た事がない。高校で一緒にやれたらいいと思うけど、あいつはもっと強いところに引き抜かれそうだし」

玖出はそう言いながら私を引き寄せ、ためらいがちにそっとキスをした。

そうされることは嫌ではなかった。

玖出のキスは母の恋人と明らかに違うものがあつたからだ。

陸人がいなくなつてから一年近く立っていたが、彼はいつもこうして遠慮がちに唇を重ねるだけで、それ以上のことを無理に強要してくることはない。

それは私を安心させていたが、玖出の心の奥に秘められたものが気になつてもいた。

彼の態度には、陸人との約束以上に何か深い理由がある気がしてならなかったのだ。

玖出はいつも私に対して自分の性的な欲望を見せないように距離を置こうとする。

まるでそうすることを恐れているように。

玖出のキスにそのまま身体を預けていたら、突然ドアを叩きつける大きな音がして、私達は驚いて顔を上げた。

副園長の大沼が燃えるような目で私達を睨み付けていた。彼だけがこの施設の中で、いつも必要以上の体罰を繰り返す。

男の引きつった表情には見覚えがあった。

まるであの時の母のような、冷たく燃える眼差し。

「ガキの癖に何やってるんだ！ お前ら！」

食堂につかつかとお入ってくると、大沼は玖出を思い切り平手で殴りつけた。

「やめてください！」

必死で止めに入ったが、いきり立った大沼は玖出のシャツの胸倉をつかむと、さらに何度も情け容赦なく殴りつけた。

玖出の綺麗な形の唇から赤い血が一筋流れ落ち、彼の白いシャツに真紅の滲みをつけた。

どんな時にも恐れを知らず、不適な笑みさえ浮かべている少年が、何か凶器を持つわけでもないこの中年の男の前で身動きがとれずにいることに驚いた。

「目を逸らすな。俺を見る」

大沼はそう言いながら玖出の髪を引き掴み、自分に無理やり目を向けさせた。

玖出を見つめながら乾いた唇を舌で舐めている。
まるで大きな禍々しい蛇の様だ。

大沼が唯一この施設で少年達ににらみをきかせられるのは、一番力のある玖出が彼に逆らわないからだ。

ようやく大沼を見返した玖出の目の中に恐怖が浮かんでいるのを見た瞬間、私は彼が心に抱えている大きな傷が何なのかを知った。

「やめて！」

大沼にしがみ付いたが、力の強い大きな男にかなう筈もなく、そのまま振り払われ、壁に打ち付けられた。

「愛美！」

「蔵木、お前はすぐに部屋に入れ。俺がいいと言つまで出てくるな」

彼が恐れている事が何であるのかすぐにわかった。

私達は、同じだった。

胸が切り裂かれるように痛み、涙が溢れる。

「玖出さん……」

彼は血を吐くように、唇から恐怖を搾り出す。

「逃げようと思ってても身体が動かない。何もかもあいつの言いなりだ。それどころか、俺は今日、自分からあいつに続けてくれと懇願したんだ……」

玖出の目から涙が流れ、彼の端正な頬を濡らす。

私達に何ができるといふのだろう。

胸の十字架が焼け付くように痛んだ。

玖出は中学の卒業式の日、傷害事件で補導された。

大沼の刺し傷は深く、何ヶ所にも渡っていて、命を取り留めたのは奇跡だった。

玖出に対して丸二年の間行われていた性的虐待が明るみになり、施設に移る前に養父が彼に繰り返していた同じ行為も警察に言及された。

大沼は玖出を支配するために薬まで使っていたという。

玖出は更正施設に送られて心の傷を癒すはずだった。

そこで何があったのかはわからない。

彼はそこを出た後、二度と私の前に姿を現さなかった。

玖出の事件の後、血なまぐさい事件に怯えた園長や職員は次々とやめてしまい、なかなか次の管理者が見つからない施設は以前にもまして殺伐としていた。

玖出というボスがいなくなった為に、少年達の暴力による権力争いは目を覆いたくなるばかりに酷くなり、そのためますます次の職員が決まらない。

高名なカウンセラーが何回か子ども達をカウンセリングしたが、自分の本音を話した子どもはほとんどいなかったと思う。

誰がどうしたところで結局日常は変わらない。

ならば、下手にかまわれて今よりもっと酷くなることを避けたいと思うのだろう。

ようやく決まった次の園長は児童心理学専門の平井という初老の男で、その世界では名前が通っている人物だったが、施設の子どもの生活よりも、定期的に催される会議や講演の方に強く興味があるようだった。

施設にいるときは園長室に籠りきりで、ほとんどの業務は副園長の寺田という中年の女が請け負っていた。

彼女もまた、児童心理学の本を書いているのだというが、施設内で厳しく子どもを叱責する姿には、愛情や理解はまったく感じられなかった。

他の無気力な大人たちは誰一人子どもに向き合おうとはせず、子ども達の酷い素行は黙認された。

こんな仕事で命を捨てることはないと言う職員の話は耳にしたが、それも仕方がないと思う。

寺田ですら、年長の少年達には怯えた表情を見せる。

大人や世間に何かを期待するという事を、皆とつくに諦めていた。

施設の温度調節は以前にましておざなりで、薬箱には常備薬が切れている事が多くなり、私はちよつとした風邪や怪我が直りきらずに何日も高熱を出しては入退院を繰り返すようになっていた。

「あんな場所から早く愛美を出したい。俺が高校を辞めて働いて、なんとか基盤を作るようにすれば……」

玖出が施設にいなくなつた後、陸人はすぐにそう言った。

陸人や玖出が目を光らせていることができない以上、外部から、たとえ施設で一番の力を持つ少年を抑えたところで結果は目に見えていた。

ただでさえ、気での事件以来悪い意味で世間の注目を浴びているから、陸人が施設内の少年達と暴力事件を起こしたなどと表ざたになつたら大変なことになる。

陸人は華南中等部でサッカー選手として華々しく活躍し、さらに強い慶京高校へと引き抜かれていた。

この高校での実績は、そのまま彼の輝かしい未来へと繋がるはずだ。

もし事件でも起こせば、それは高校退学のみならず、サッカー選手としての未来を断たれるのと同じ意味を持っている。

たとえ独立しても未成年である陸人が私をすぐに施設から引き取ることとは不可能だから、私が義務教育を終えて自分で働けるようになるまでは施設で暮らすことを避ける道はなかった。

「大丈夫よ。陸人が思ってるほど弱くないもの。それに、あと半年の辛抱だから。そしたらどこか住み込みの仕事を探せばいいわ」

私は陸人を心配させないようにそう言った。

本当は、自分の将来のことなど考えたことはなかった。

自分に興味を持つことがまったくできなかつたのだ。

今の生活を変えたいとか、もっと健康な身体が欲しいとか考えもしなかつたし、高熱を出して意識を失い目が覚めたときも、ああ、まだ生きているんだなとぼんやり思うだけだった。

無彩色の毎日が同じように始まり、終わらない夢のように繰り返される。

「陸人は絶対に高校をやめちゃだめよ。せつかく名前が知られてきてるんだもの。このままサッカー選手を目指して欲しいの。お願い」

玖出が施設を去った後、私はいつもその時一番力のあるものに抱かれていた。

それしかあの施設で自分を守る方法を知らなかつたし、力の強い男に求められて逆らうことが怖かつた。

それは少年であったり、カウンセラーや学校の教師であったりした。

これはお前の烙印だと私にクロスをかけた母の恋人の体温を、私ははつきり思い出す。

あの日、私の裸足のつま先を染めた濃い朱の色は、そうしていつしか身体中を染めていくのだ。

施設に入ってから三度目の秋を迎えていた。

そしてその頃、私は宏章に出会つたのだ。

「愛美、そろそろ回診の時間だぞ。あと十分位したら病室に行くから戻っていなさい。あまり外にいちやだめだぞ」

晴れ渡る九月の秋空の下、病院の中庭でピンク色の雲のように咲いた可憐なコスモスを見ていたら、白衣を着た若い医師が廊下の窓からいつもの快活な声で私に声をかけてきた。

ひと月ほど前に風邪を引いて高熱を出し、肺炎を起こして入院していた私は、そのままずっと退院できずにいたのだ。

「はい。結城先生。ごめんなさい。お花がすごく綺麗だったから」

そう答え、沢山のコスモスの花の向こうにいる医師を見ると、彼は人懐っこい笑顔を浮かべ、私だけに聞こえるように少し声をひそめた。

「後で病室に山ほど持って行ってあげるよ。うるさい看護婦の目を盗んでね」

後ろについたベテランの看護師さんがちらつと医師を見上げて咳払いしている。

三十代の結城医師は、この病院の老院長の孫だった。

院長の一人娘がお嫁に行つて、代わりに彼がこの歴史のある大きな総合病院を継ぐのだと、他の患者が噂しているのを聞いた。

陸人が華南にいた時、唯一の友人だった少年の兄だということもあつてか、医師は自分の妹のように私に親しく接してくれていた。

手を振って歩き去った医師を見送り、ふと渡り廊下を見ると、中庭に面した大きなガラス戸の向こうに、一人の背の高い黒髪の少年が病棟へ向かって廊下をうつむき加減に歩いているのが目に入った。長めの前髪と日に焼けて整った横顔を、どこかで見覚えがある気がする。

デニムにラフな白シャツを着、肩に大きな黒いスポーツバッグを提げていた。

右手で綺麗な花束をわし掴みしているのだが、持ち手の部分は力が入ってしまったせいか、すでに包装紙が切れそうだ。

大人びてはいるが、おそらく私服の高校生だろう。

バッグについた大きな校章は華南のものだ。

鮮やかなブルーで華南学院サッカー部と書かれている。

それを見て、陸人が華南にいた頃、一緒に部にいた少年だと思いつ出した。

キレのある動きで目立つ、能力の高い選手だ。

彼がボールを受けるたび、見学の少女達が歓声を上げていた。

少年は思いつめたような顔で足を進めては立ち止まり、元来た方向に引き返してはしばらくするとまた振り返る。

不思議に思っただけで見ていると、病棟の方を見ていた彼が急に慌てて廊下の隅に花束を置き、急ぎ足でその場を去って行くのが見えた。

彼が姿を消すのと入れ違いに、病院のガウンを着た中年の美しい女性がぼんやりした表情で歩いて来て、廊下においてある花束にゆつくりと目を留めた。

花束を拾い上げ、あどけない少女のように嬉しそうな笑顔を浮かべると、花の香りを嗅ぐように繊細に整った顔を花束にそっとうずめる。

通りかかった看護婦が女の人を見つけ、少し慌てたように肩を抱くと、小さな子どもに言い聞かせるような表情で話しかけた。

女性は看護婦の存在にも気がつかないようにずっと花を見たまま笑顔を浮かべ、そのまま病棟のほうへ手を引かれて行った。

私は急ぎ足で渡り廊下への入り口をくぐると、歩き去った少年の姿を追っていた。

廊下の角を曲がると、広い待合室のホールに溢れかえった患者たちの向こうに、ポケットに手をつ込み、足早に歩く少年の後姿が見える。

なぜ彼の後を追ってしまったのかはわからない。

私は今までそんな行動を一度も取ったことがなかった。

少年は大きなガラスのドアをくぐると足を止め、ふとこちらを振り返った。

私達が見詰め合っていたのはほんの一瞬だったと思う。

すぐに目を逸らし、病院を後にした彼の黒髪を、秋の風がさらりと揺らした。

” K I R I S H I M A H I R O A K I ”

花束を置いたその少年のバッグには、そう名前が押してあった。

「昨日またプロのスカウトに声をかけられた。このまま行けば卒業を待たずにプロ入りできるかもしれない。ユースの話はあるけど、できるだけ条件のいい所を選びたいんだ。愛美から遠くなりすぎるのも避けたいしね」

その夜、陸人は病室に入ってくると他の患者に迷惑をかけないように私のベッドの回りのカーテンを引き、枕もとの小さな明かりをつけるそう言った。

ベッドの横に椅子を引いて腰掛け、腕をついて起き上がった私を心配そうに見る。

「起きるなよ、愛美。遅くなってごめん。練習が遅くなった。慶京からここまでは遠いな。電車でちょうど二時間かかる」

「遠いところをありがとう。大丈夫よ。もう熱も下がったし。せつかく陸人が来てくれたんだもの、少しくらい」

「抗議は却下。もう消灯だから横になってなきゃだめだよ。子どもは寝る時間だ」

「一つしか変わらないのに」

四月生まれの陸人と三月生まれの私は、学年では一つだが二歳近く年が離れている。

私が文句を言うと陸人はわざと真面目な顔を作った。

「一つじゃないよ。十九センチも違う。俺と同じくらい大きくなったら大人だつて認めてやる」

「そんなに大きくなれるわけないじゃない」

私が吹き出すと陸人も笑った。

まるで私を包み込んでくれているような、優しくゆったりとした陸人の笑い声の響きが好きだった。

陸人に触れられると、私は始めて自分の身体にも体温があるのだと感ずる。

「この間測つたら一八一センチあった。まだまだ伸びるよ。愛美なんか一抱えだ」

陸人は私の両肩を捕まえてそのままベッドに軽く押し倒し、間近から覗き込むと額に手を当てた。

「ほら。まだ微熱がある」

陸人のハスキーな囁き声が耳元で聞こえた途端、全身がカツと熱くなる。

私は陸人から眼をそらし、浅黒い長い指から逃げるように枕に顔をつけた。

陸人に対する特別な気持が何なのかを、この時私はすでにはつきりと知っていた。

「熱なんかない……」

声が震える。

兄が私の額に触れることなど当たり前だ。

それでも身体には甘美な熱がこもり、心臓がとくとくと早鐘のよ
うに鳴っている。

私は息をひそめ、目を閉じた。

陸人は会うたびに大人っぽさを増し、今では昔のほっそりとした
少年時代の面影を探すのが難しいほどだ。

高校一年の陸人は日本でも有数のサッカーの名門校、慶京の選手
として華々しい活躍をしていた。

最近の大きな大会でも最優秀選手になり、天才児と大騒ぎされて
新聞や週刊誌にまで名前が載っている。

けれど、その成功がどれ程の努力を伴うものかを知る人は少ない
だろう。

華南のサッカー部での二年間、陸人はほとんど学校の話は口にせ
ず、私が華南を訪ねることも許さなかった。

南米の激戦地で代表まで勤めたことがある父親の血を引く陸人の
実力は、回りの少年に比べ、あまりにも際立ちすぎていた。

眩いばかりの才能と恵まれた身体。

それ以上に特筆すべきは惜しみなく努力する彼の前向きな姿勢だ
った。

一人遅くまで練習を繰り返すのは虚栄や自己満足のためではない
ことを他の部員が知るはずもなく、嫉妬が彼を孤独に追いやった。

華南は名のある家柄の子ども達が通う事で有名な学校だったから、
特待生でサッカーを続ける施設出の陸人がどんな想いをしていたか
は想像に余りある。

それでも陸人は自分の辛さを口に出すことは決してなかった。

内緒で華南のコートを何度も訪れなければ、私は兄がそんな状況
にあることを知らないままで終わっただろう。

陸人は私を幸せにしたいといつも言う。
でも、本当に幸せにならなくてはいけないのは彼のほうなのだ。
私は陸人にそう思われる資格などない。

「いつも愛美の事を考えてるよ。もう少しの辛抱だ。お前の為に必ずサッカーで名を上げる。いつか必ず一緒に暮らそう」

そう言って、陸人は私の手を取り、握り締めた。

その夜はいつまでも眠る事ができなかった。

私はベッドから起き上がると病院の静かな廊下を歩き、手洗い場で水道の蛇口をひねった。

流れ落ちる水が指先を濡らしていく。

冷たい水が指先から感覚を奪っていくまで、私は手を浸し続けた。
私の中の罪深いものを洗い流す事ができたら。

病室を後にするときの陸人の後姿を思い出していた。
あのしなやかな背中にそっと身体を寄せ、滑らかな肌に口付けたらどんな気持ちだろう。

胸を締め付ける強い想いに耐え切れず、顔を伏せた。

私は実の兄を愛していた。

あの腕で抱かれたいだ。

けれど、私は陸人を妹の顔で送り出す。

鏡に映る自分の顔を見ることができなかった。

そこにはきつと、母が言った通りの醜い顔が映っているに違いない。

私は嘘つきなのだから。

暗い病棟にともる蛍光灯の明かりの下で、私の涙がいくつもいくつも頬を伝い落ち、指を濡らす水の流れに押し流されていった。

私の微熱はなかなか引かず、結城先生は少し難しい顔をして聴診しながら「胸のレントゲンを取ってみよう」と言った。

「このままカルテを持ってレントゲン室へ行つて。写真を撮り終えたらそのままベッドに戻っていいよ。病室を出るときは何か暖かいものを羽織っていくこと。気分が悪くなったら誰でもいいから看護師を捕まえてそう言いなさい」

「はい」

私は頷くとベッドから起き上がり、はだけたガウンを直して医師に言った。

「先生、コスモスありがとうございます。すごく綺麗」

私のベッドの横には、満開のコスモスの大きな花束が花瓶に挿してある。

医師はにっこり笑って私に小声で囁いた。

「俺が花泥棒だなんてばらしちゃだめだよ。病院を首になったら路頭に迷うからね」

その表情がおかしくて、私もくすつと笑いを漏らした。

医師が私のベッドの周りを囲んだカーテンを開けると、優しい目をした快活そうな少年が壁に寄りかかってベッドの脇に立っていた。穿き込んだデニムと身体にフィットしたネイビーのパーカー。

日に焼けた肌と明るい色の髪をして、若い医師とよく似た顔立ちをしている。

「愛美、今日はどう?」

「結城さん」

少年は真っ赤な瑞々しい苺が入った白い紙の手提げ袋を差し出した。

「また何にも食べてないんじゃないかって陸人が心配してた。ってことで忙しいあいつに代わって俺がお見舞い。悪徳医師の魔の手からも守らないとね」

「わあ。嬉しい。いつもありがとうございます。季節外れなのに、大きな苺」

私は小さな子どものように大喜びして、結城から苺を受け取った。苺は私の一番好きな食べ物だと彼は知っていて、いつもこうしてお見舞いに持って来てくれる。

「悪徳……。相変わらず口の減らない奴だな、伶。もう高二なんだから、そろそろ大人になつて生意気を卒業したらどうだ」

少年の兄は嫌そうに顔をしかめてそう言ったが、口調とは裏腹に、その目は年の離れた弟への優しい愛情に満ちていた。

「兄貴が思ってるより、子どもにも苦勞が多いんだよ」

結城は大げさにため息をつき、それから私を見て微笑んだ。

「レントゲン室、俺が付き添うよ。こんなに可愛い子が一人で歩いてて、誘拐でもされたらどうするんだよな？」

肩にかけた黒いスポーツバッグをベッドの横に置いて、結城が責めるように兄を見上げた。

バッグにはこの間見た少年と同じ、鮮やかなブルーで華南の校章が付いている。

結城は実力のある華南サッカー部の中でも指折りの選手で、陸人とは随分親しくしていたらしい。

プライドの高い華南の生徒達の中で、施設育ちだと知っていながらまったく気にせず今も兄と付き合っている結城は、私にとっても親しみの持てる、頼りがいのある兄のような少年だった。

彼は陸人が慶京に移ってからも、こうしてよく私を見舞ってくれる。

「どこかの誘拐犯よりお前が一番危なそうだ。いいか、ちゃんと行つてまっすぐ帰って来いよ」

「兄貴も看護師さんどっかに連れ込んで悪い事してないで、まっすぐ診察室帰れよ」

「お前……」

いつもながらの兄弟のやり取りがおかしくてしょうがない。同室の他の患者もくすくす笑っている。

この二人は人の気持ちを和ませる雰囲気を持っていた。重い病気の患者も結城医師と話す時には笑顔になる。

器用そうな指をした聡明な弟も、おそらく兄と同じ天性の医師の素質を持っているのだろう。

医師は外科医だったが、執刀がない日は外来患者も診察してくれる。

いったいいつ眠っているのかと思う程熱心な仕事振りには患者の信頼も厚く、評判も高かった。

私が施設の近くの小さな病院からここに移ることができたのも、結城が自分の兄に話をしてくれたからだ。

診察料は陸人の出世払いだから心配しないでいいよと医師は私に言った。

「間違いなく、三倍にはなって返って来るね。俺の投資だから愛美が心配する事は何もない」

レントゲン室に向かう病院の廊下を、私の歩調に合わせてゆっくり歩きながら結城が言った。

「陸人は今日も試合だよ。スカウトの見学も凄い数だ。たいした奴だよ。おかげで俺はきっぱりサッカーをやめられる」

「結城さん、サッカーは続けないの？」

「高校卒業まではやるよ。あと一年と少し、全力でね。でも、残念ながら俺は自分の限界が見えてるからね。陸人を見ると、そこに俺がサッカーに望むものが全てあるんだ。」

諦めじゃないよ。あいつの存在が俺を満たしてくれてるというか」

結城はそこでしばらく言葉を切って、それから言った。

「医者になって患者を助けたいと思うようになった。兄貴も爺さんもそれを望んでるし、レールが敷かれてるみたいで嫌だったんだけど、ここまで病院に出入りしてるというんなことを見るからね」

私は頷いた。

結城はきつと彼の目指す医師になり、沢山の人の命を救うのだから。

その姿が見える様だった。

いくつかあるレントゲン室のドアの前で順番を待つ患者達の中に、看護師に付き沿われた女性がぼんやりした表情で車椅子に座っているのに気がついた。

この間の少年が置いた花束を拾ったあの。

透き通るような青白い肌と重い病気の患者に特有のやつれた顔立ち。

頭に被っている柔らかかなスカーフが、この女性の病気がどんな種類のものであるかを物語っていた。

細い腕に射した点滴の管が痛々しい。

「こんにちは。あとで病室に伺おうと思ってました」

声を掛けられた相手が認識できずに虚ろな目を向けたその女性に、

結城は優しく声を掛けた。顔見知りの様だった。

「いつも綺麗ですね」

その言葉を聞いた女性の顔に、少女のようにあどけない微笑みがゆっくりと広がった。

小さな子どものような心に戻ってしまっているこの女性は、綺麗だと言われたことが嬉しいのだ。

その言葉はきくと、彼女の心の何かに優しく触れるのだろう。

「一ノ瀬さん、中へどうぞ」

レントゲン室が開き、技師が声を掛けた。

看護師が幸せそうな笑みを浮かべたままの女性にいたわるように声をかけ、車椅子を押してレントゲン室に入って行く。

一ノ瀬。

あの少年の苗字と一緒にではないのが意外だった。病気の母親を見舞っていたのだと思っていた。

今の女性の顔立ちには、どこかあの少年の面影がある気がしたからだ。

「結城さん、あの女の人を知ってるの？」

黒髪の少年のことが、何故だかずっと気にかかっていた。

「この間、結城さんと同じサッカー部のバッグを持った人が花束を持って渡り廊下を通るのを見たの。その人はあの女の人の姿を見ると、花束を置いて慌てて帰って行ってしまった」

結城は少し驚いた顔で私を見た。

「花束？ あいつ、見舞いに来てたんだ」

「きりしまひろあきってバッグに名前が押してあった」

「そいつは俺の幼馴染で、あの人は奴の叔母だよ。俺らは昔、よくあの人の家に遊びにいったんだ。当時は結婚して子どももいたんだけど、二人とも一年半前に事故で亡くして。優しい人で、子どもが見てもうつとりするような美人だったよ」

「ずいぶん悪いの？」

結城はしばらく黙ってから静かに言った。

「脳に取り除けない大きな腫瘍があつて、今では昔の事がほとんど思い出せない。痛み止めの薬を大量に投与してるから、あの通りだよ。なんとか命をつないでる」

すぐに言葉を返せなかった。

迫りくる死を待ち受ける恐怖を知らずにすむのは幸せなのだろうか。

あの少年の叔母。

花束の包装紙が切れそうなほど強く握り締めていた、彼のあの思いつめた表情。

「蔵木さん、中へどうぞ」

技師がドアから顔を覗かせた。

「ほら、愛美の番だよ」「結城が私にそう言つと、安心させるように背中をそつと叩いた。

私はまた軽い肺炎をぶり返していることがわかり、少し退院が長引いた。

入院している時が私にとって一番よい環境にある事を陸人は複雑な表情で認めていて、とにかく治りきるまでお願いしますといつも結城先生に頭を下げていた。

それから何日か経ち、点滴が外れてベッドから起き上がれるようになる、私は自分の柵に置いてあるスケッチブックを取り出して窓から見える中庭に揺れるコスモスを白い紙に写し始めた。

絵を描くことが好きだった。

言葉で自分の心を表すのは昔から苦手だ。

母が何日も家に帰ってこない時は、紙と鉛筆を持っていろいろなことを想像して過ごした。

美しいドレスやお城、沢山の花の中に陸人と私が手を繋いでいるところ。

けれど、今まで父母の絵を描いたことは一度もない。

小さな頃、学校で家族と自分の絵を描きなさいといわれた時、どうしても描くことができずに、私は白い画用紙に白いうさぎの絵を描いた。

昔、母が陸人と私を一度だけ移動動物園に連れて行ってくれたことがある。

その日の母は穏やかで、優しかった。

柵で仕切られたふれあいコーナーの中に小さな白いうさぎを見つ

け、陸人が捕まえて私にそつと手渡してくれた。

柔らかく、ふわふわしたうさぎは逃げようとせず、私の腕の中で小さく震えている。

「うさぎさん、どうして震えてるの？」

珍しく、私たちが遊ぶ姿を椅子に座ってずっと見ていた母がしばらくして答えた。

「人間が怖いだよ」

暗い小さな檻に入れられた動物達はとても悲しそうに見えて目を合わせるのが怖く、私はずっと陸人の後ろに隠れ覗き見ていた。

檻の中をただ行きつ戻りつしている毛艶の悪い鹿は、柵に身体を何度もこすり付けているところの毛が剥げ落ちている。

鉄の柵を掴んだままずっとこちらを睨み付けている大きな黒いゴリラ。

死んだように寝そべっているかと思うといきなり起き上がって恐ろしい咆哮を上げるライオン。

「威嚇してるんだよ。誰にも傷つけられないように。そうするのは、本当は弱いからなんだって……」

陸人は言った。

怒っているのは悲しい気持ちで一杯だからなんだ。

動物は泣けないからああして怒るのだと、ぼんやり考えた記憶がある。

ある時期から、陸人は私にも涙を見せなくなった。

傷ついた心は彼の身体の奥深くに封印され、それすらわからないように傷の周りを覆ってしまった。

誰もその傷に触れ、癒すことはできないのだ。

泣くことができない動物達の姿を思い出すと、私は今でも胸を締め付けられる。

悲しみを怒りに変えることすらしなければ、その想いはいつたどこへ行くのだろうか。

それはいつか全てを脆く崩してしまうのではないだろうか。

ふと気がつくと、あの日見た少年の横顔を描いていた。

陸人以外の人を描いたのは初めてだった。

「愛美は本当にいい絵を描くなあ」

結城先生がいつの間にかベッドの傍に立っていたのに気が付き、私は真っ赤になって慌ててスケッチブックを閉じた。

「絵を描ける才能に憧れるよ。俺は全然だめだ。どうも描きたいことが紙に収まりきらなくて、机にまではみ出してしまう。子どもの頃は仕方ないから画板ごと提出したよ」

「そついうの、素敵な絵だと思います」

「画板ごと絵を出されて戸惑っている教師の顔が思い浮かんで吹き出した。」

「愛美の絵には対象の背景が見える。そこに描いてある彼の想いかね」

「私、この人を知らないんです。何度か見かけただけ」

なぜか頬が赤くなった。

医師はしばらく私を見てからさりげなく言った。

「その絵の彼にそっくりな子がその面会室に座ってるよ。俺が呼んだ時間より随分早くから来てるんだが中々仕事のきりがつかない。もう少し待ってってくれるように誰かが言ってくれればと助かるな」

待合室は珍しくほとんど人がいなかった。

平日の午後のせいだろうか。

この病院は病棟が七階まであり、フロアーごとにこうして明るく清潔な面会室があるので、見舞いに来る人が後をたたない。

入り口からそつと覗くとあの少年が椅子にもたれて長い足を投げ出している後姿が見える。

私は胸の動悸を深呼吸で抑えてから中に入り、彼に近づくと後ろから声をかけた。

「あの……」

その後、どうやって言葉を繋いだらいいのかわからず沈黙していると、少年が振り返って私を椅子から見上げた。

伸びかけた黒髪が、端正な顔立ちを引き立てている。

日に焼けた肌に洗いざらしたチェックの綿のシャツと、デニムがよく似合っていた。

私が何も言わずに立ったままでいたら、表情を変えないまますぐに目を逸らしてしまう。

意外な反応に戸惑っていた。

男の人に自分から声をかけたのは生まれて初めてだったが、こんな態度を取られたのも初めてだ。

いつも緊張するほど見つめられてしまうから、知らない男の人が苦手だった。

特に母の恋人と関係してからは、男の人たちが私を見る目が明らかに変わっていた。

仕事に出かける時の母を見る男の人達のように、独特の熱を帯びた目で舐めるように見つめる。

私がどんなことをしているのか見透かされているようで怖かった。

少年の態度でふっと身体の力が抜けた。

私はもう一度少年に話しかけた。

「すみません。結城先生から伝言を預かってきました。あと三十分くらいかかるそうです」

少年はもう一度私を見て、「どうも」と一言言った。そしてまた沈黙。

彼は私を無視したまま手にした本を読み始めた。

「隣に座ってもいいですか？」

自分の言葉にも驚いた。

これは私が言っているのだろうか。

微かに頷いた気がしたので、私は少年の横に腰を下ろした。

気持ちのよい秋晴れの日で、少し開けた窓から時々静かに吹き込む風が少年と私の髪を揺らす。

私達はただ黙って座っていた。
部屋の向こうで、穏やかに話している他の患者と家族の声が聞こえる。

熱心に本を見ている少年に私は聞いた。

「その本面白いですか？」

少年はちらつと私を見た。

「まあね」

「もし私がここにいるとお邪魔なら……」

最後まで言い切らないうちに、うつむいて本を読んだままの少年がぶつきらぼうに言った。

「別に。邪魔じゃない」

私達はそれきり言葉を交わさず、二人で並んで座っていた少年が手にしてる本は、ずっと逆さのままだった。

自然と笑みが浮かんでくるのは窓から差し込む午後の柔らかい日差しのせいだろうか。

本を読む少年の隣で、ほんのりと幸せな気持ちに満たされたまま、窓の外に見える中庭のコスモスに目を向けた。

少年にはそれきり会うことはなかった。

退院の日、面会室の前を通りがかり、ふと彼が座っていた椅子に目をやった。

彼は花束をあ的女性に渡すことができただろうか。

あの後、あの女性のことになった。一ノ瀬という名前を頼りに最上階にある特別室を探しあてたが、そこには数日前から面会謝絶の札がかかっていた。

「二週間後にもう一度様子を見せて。薬は忘れずに飲むこと」

最後の診察の時に結城医師はそう言って看護師に予約日の指示をすると、回転する椅子をこちらに向け、大きな机に肘を突いて真面目な顔で私を見た。

「施設に戻っても無理は厳禁だよ。愛美はもつと自分に興味を持たなくちゃだめだ」

看護師が書き込んだカルテを持って出て行き、柔らかい白と薄いベージュで統一された診察室には一人きりだ。

「俺は悪徳医師だから、自分がそうしたい時には患者に個人的な情を持って、妹のように思うのも平気なんだ。まだこんなに若い可愛い女の子が明日の話をまったくくしないことがやりきれないんだよ。傷ついた小さな子ども達をさらにいたぶるような世の中に反吐がで

る。

もし、愛美があそこを出て違う所で暮らしたければ、いつでも力になる。遠慮しないで言っただけいい」

私は診察室の椅子に座ったまま、首を振った。

「いいえ。私はあそこにいます。母が……」

なぜ母という言葉が出てきたのだろう。

「母が迎えに来てくれた時、私がいなくて悲しいと思っただけ……」

言葉が空虚に響いているのはわかっていて。

母が私を迎えに来ることなどありえない。

あの施設の子どもは皆それがわかっていて。

それでも小さな希望を捨てることができず、施設でその日を待ち続けるのだ。

父や母が自分を迎えに来て、これは全部間違いだった、本当はお前を愛しているのだと抱きしめてくれる日がくることを。

医師は小さくため息をついた後、真剣な口調で私に言った。

「もし何かあったら、必ず俺に言うんだよ。自分でどうにかしようとは絶対に思わないこと。わかったね？」

「はい」

私は答えて立ち上がった。

「ありがとうございます。結城先生」

頭を下げ、診察室のドアを押す。

医師が心配していることが何なのかわかっていた。

私が望まない妊娠をすることを恐れているのだ。

その時の私にとって妊娠は漠然としたものでしかなかった。

自分が新しい命を宿すことができる身体だと思うことが難しくもあつたし、子どもが私を母親として選ぶことなどありえない気がした。

だが、私はいつも誰かに身体を求められていて、相手が私をぞんざいに扱うことも多いのだ。

おそらく、私が誰にも心を開かないからだろう。

何をされようと反応せず、黙って横たわったままの私に、男達は強く苛立つ。

施設に戻ったその夜、自分の部屋に入ろうとした私に一人の少年が近づいて来て腕を強く掴んだ。

赤く燃え立つ髪の色は、彼の性格そのものようだ。

耳のピアスと顔に残る細い傷跡が、年よりも大人びた雰囲気をさらに強調している。

陸人がいた頃から、気の荒さと言動で何度も警察の手を煩わせていた一つ年上の少年だった。

何度も施設を飛び出していたが、暴力団に目をつけられて身辺が危なくなつたため、ほとぼりが冷めるまで施設に身を隠しているという噂を聞いた。

「愛美、随分長い入院だったな。お前の帰りを首を長くして待ってただぜ」

川崎颯という名前のこの少年の顔立ちと雰囲気は、母の恋人を思い出させる。

「離して」

私は手を振り払い、身体を離れた。

川崎がいつも私を目で追っていることは知っていたが、会話すらほとんど交わしたことがなかったのだ。

施設の少年たちの間ではまた争いがあったらしく、男子寮の一番広い一部屋を実質的に独占している川崎が、今のリーダーであることは明らかだった。

すなわち、川崎が私を手にする権利を手にしたということでもある。自分を拒んだ私に怒りの目を向けると、少年は言った。

自分を拒んだ私に怒りの目を向けると、少年は言った。

「玖出ならよくて俺はだめかよ！」

まるで世の中の全てを憎んでいるようなその眼差しが、母の恋人を思い出させるのだと気がついた。

「玖出さんは何もしなかったわ。あなたとは違う」

私は川崎をきつく見返してそう言った。

あの夜私を抱きしめて泣いた彼の姿を思い出す。

「嘘をつくな！俺が騙されると思うなよ！お前は選べる立場じゃねえんだよ。お前を欲しいと思った奴がこのボスになる。ただ黙って従ってればいいんだ」

川崎は私を壁に強く押し付け、腕で押さえつけると身体を触りだした。

施設の他の少年が廊下を通りがかったが、すぐにうつむいて足早に通り過ぎていく。

「やめて！」

私は壁に身を寄せる様に身体を捻り、はだけた服を掻き合わせて自分の身体を隠した。

「抵抗すんなって言ってんだろ！お前みたいな女が今さらなんだよ。お前がやって来たことを兄貴にしゃべってもいいんだな！」

川崎はついに恐れていた言葉を口に出した。

いつかは言われると覚悟をしていたのに、動揺を押さえられない。

言葉を一つも言い返せないまま、私は川崎から眼を逸らした。

陸人が施設を去ってから私がして来たことを、絶対に知られたくない。

川崎は、私がそれを恐れていると感じている。

男子寮の廊下では、指導員にすらすれ違わなかった。

身体から力が抜けた私を無理やり部屋に連れ込むと、川崎はベッドに座って背もたれに身体を預け、煙草に火をつけながら目を上げて言った。

「脱げよ。あいつには見せてたんだろ？」

玖出に対して特別な感情があるようだった。

玖出が去った後、他の少年達が私にして来たことを知らないはずがないのに、川崎は玖出だけを意識している。

「お前がいない間に学校の担任からは充分金をいただいといた。出世コースまっしぐらの教師の癖に、教え子に無理やり手を出すなんてふざけた奴だぜ。この不景気の中に淫行教師の烙印押されて教職失ったらどうにもなんねえもんなあ。自分の女房がくたびれ果てた大ブスのババアじゃお前見て狂っちまうのもしかたねえけどよ」

私が教師に関係を強要されていることを、なぜ知っているのだろう。

それを強請のねたにしている。

回りの少年から社会人にまで、川崎は恐喝の手を広げていたのだろうか。

呆然と川崎を見返した。

川崎は大きく吸い込んだ煙をゆっくり吐き出しながら、私を威嚇するように目を眇め、低い声で言った。

「お前を使って稼ぐこともできるんだぜ？ その辺の腹の出た油くせえ親父にとつかえひつかえ犯られるのは嫌だろ。お前が俺を飽きさせなかつたら小遣い稼ぎの道具にはしないでやるよ」

窓の外では、雨が強く振り出していた。

私は川崎の目の前で、言われた通りに身にまとっていた服を全て脱いだ。

そのまま川崎を真っ直ぐに見つめる。

しばらく動きを止めて私を見ていたことに気がついた川崎が、少し動揺したように視線を逸らした。

燃え尽きそうになっていた煙草を空き缶に捨て、彼はそのまま咳くように言った。

「来いよ」

裸の私を抱きしめた時、大人の男のように振舞っていた少年の身体が少し震えているのに気がついた。

彼が私に触れたのはこの時が始めてだった。

素肌が触れあうと、川崎は自分を抑えきれないように私を組み敷いた。

屋根を打ち付ける雨の音が、暗い部屋でギシギシと鳴るベッドの軋みを押し流していく。

壊れた雨どいを伝ってコンクリートを打つ水滴の音が、アパートの水道からいつまでも漏れ落ちる水の音を思い出させた。

「もっと嬉しそうな顔しろよ。全然感じねえのかよ。あいつにはどんな顔を見せたんだ」

川崎は私を抱きながら途切れ途切れに言った。

汗が身体を伝う。

「あいつが今でも好きなのか。あいつだけが特別なのかよ！」

その言葉で、彼が私と玖出の間にあつた感情に嫉妬しているのだと知った。

確かに、他の少年達にはない気持ちを、玖出にはほのかに持っていたかもしれない。

川崎は、私が玖出に恋愛感情を持っていると思つて居るのだ。

私が施設に入った時、一番最初に会つたのが川崎だつたことを思い出した。

私を驚いたような目で見つめ、まだ顔に幼さの残る少年は言つた。

ここはお前みたいな奴が来るとこじゃねえよ。早く親のところへ帰れ。

「……お前はあばずれだ。誰にでも抱かれるあばずれ女だ。これが当然の仕打ちなんだ」

川崎が苦しげに嘔き、両腕で私を強く抱きしめた。

言葉とは裏腹に、少しでも私を離したくないかのように。

…… 威嚇してるんだよ。誰にも傷つけられないように。そうするのは、本当は弱いからなんだって ……。

一人でも生きていけると虚勢を張りながら、私達はこの施設の屋根の下で身体を寄せ合つている。

お互いに触れないように、目を合わせないように距離を置きながら。

誰かに愛して欲しくとも、その方法を知らない。

思いを遂げた後、私の身体に押し掛かつたままいつまでも顔を上げない川崎にそつと腕を回すと、彼は傷口に触れられた様に、ビクッと身体を震わせた。

傷つけることでしか相手に触れられない少年。

「お前が悪いんだ。お前が……」

小さく呟く少年が泣いているように見えた。

自分の部屋のドアをそつと開けた時、部屋はすでに明かりが消えていた。

静まり返った施設の中に、どこかの部屋から子どもの泣き声と職員
員の怒りを含んだ声が聞こえる。

あなただけが寂しいわけじゃないのよ。皆同じ想いをしてるの。
ますます泣き止まない子どもの声を無情に打ち消す叱責。

足音を忍ばせて部屋に入り、軋まないようにドアを閉めたと、
廊下の向こうで壁に打ち付けるようにドアを開けた音が聞こえた。
すぐにドアがボタンと閉まる。

急いで二段ベッドの下段に潜りこみ息を潜めていると、ドアを開
ける音がして見回りの職員が中を覗く心配がした。

私のベッドの傍まで来るとわざわざ懐中電灯を照らし、本当に私
なのか満足するまで寝顔の確認をする。

職員が部屋から出てドアを閉め、廊下に響く足音が小さくなって
いくと、ようやく緊張していた体から力が抜け、私は小さく安堵の
ため息をついた。

危ない所だった。

今夜は副園長が見回っている。

寺田は、私の行動を怪しみ、常に監視の目を向けていた。

寺田は独身で、四十代後半の地味な女だ。

派手な服を好まず、化粧をしたのも見たことがない。

彼女は施設の子どもの達の恋愛や、性に関することに神経質だった。

口に出したりふざけたりすることも許さず、テレビで少しでもそんな話題が出ると即座に消してしまう。

特に私に対しての監視は徹底的で、食事の席で他の少年が私に目を向けると必ず夜には私を呼び出し、挑発するような態度はやめなさいと叱責する。

三ヶ月ほど前、私より一つ年上の少女が妊娠しているとわかった時の剣幕は凄まじかった。

あらゆる言葉で少女を罵り、ヒステリックに体罰すら与えそうになって、振り上げた手から少女を庇った私は変わりに何度も叩かれた。

あまりの激高ぶりに、この中年の女が狂ってしまったのかと見ていた全員が驚き、部屋の中が静まり返った。

「汚らしい！ 相手がわからないだなんて、あんたは盛りの付いた牝犬と一緒によ！」

食堂の床につずくまり、ただ泣くことしかできない少女に寺田は吐き捨てるように言った。

鍵を外しておけと強要されていた少女だ。

父親はきつとこの施設の少年の誰かに違いなかったが、彼女は報復を恐れて最後まで少年達の名前を口に出さずにいた。

一晩中泣き明かした少女は身重の身体で施設を抜け出し、そのまま帰ってくることはなかった。

少女のことがどのように処理されたのかは知らない。

ただ、この事件があった後も寺田は変わらずこの施設で副園長を続けている。

もう、この程度では誰も驚かないほど、感覚は麻痺していた。

寺田は私を副園長室に呼び出しては、他の少年と性的関係があるかを問い詰めた。

「正直に言えば私は怒らないのよ。こんなことを聞くのはあなたを心配しているからだってわかるわね？」

児童心理学の書籍が山ほど詰められた大きなテーブルに置いたコーヒークップを両手でおさえ、ぐつと身体を前に乗り出す。

眼鏡の奥の目が好奇心に輝いた。

無関心を装った言葉の裏に隠されている、女をあくなき詮索心。

こんな時の寺田の目には、取り付かれたような光がある。

「あなたはついぶん奔放だという噂を耳にはさんでるわ」

そこで言葉が途切れ、男のような目線で私の身体を眺める。

寺田はコーヒークップを口元に運ぶと舌で薄い唇を舐めた。

「あなた、大人しそうな振りして施設内で何度も嫌らしい行為を繰り返してるんじゃない？」

嫌らしい行為。

自分の行動が綺麗だと思ったことはもちろんなかったが、女の言葉はそれ以上に下世話な響きを帯びていた。

「何も」

頷いたらそれで終わると知っていた。

寺田の歪んだ興味を満足させるまで詳しく聞かれ、そのあと全て

は資料にされて性格形成の不安というもつともな理由の添え書きと共に、私はここよりももつと厳しい更生施設に送られる。すでに一人、少女がその処分を受けていた。

「何もしていません」

私は寺田の目を見て言った。

「そう」

忌々しそうに引きつった顔で寺田は言った。

それ以上私からは何も聞き出せないと思ったのか、寺田は急に興味を失せた顔で机の上のメモ書きをばらばらと確認した。

「学校の保険の先生からも電話が入ってるわ。用件を聞いたけど、あなたが元気なようなら連絡は結構です、ということよ。」

時間があれば保健室に顔を見せてくれるように伝えて下さい、ですって。ただでさえ、施設の子どもは待遇が悪いと世間から誤解されるのだから、理由もなく辛そうな顔をするのはやめなさい。

保険の先生に心配されるような態度を取るのには感心できませんね。あなたが自分で明るくなるように努力しなければ、決して幸せにはなれないですよ」

「はい。気をつけます」

保険の教師は去年赴任してきた佐久間という若い女性で、保健室で過ごす時間が多い私を気に掛けてくれているようだった。

入院中も何回か、何かのついでだと顔を見せてくれた。

私が唯一緊張しないで側にいることのできる教師だったが、話をし過ぎて自分の過去を知られてしまうのが怖かった。

だから親しさが増すに連れ、保健室には近寄りがたくなっていたのだ。

もつずっと顔を見せていない私を心配して電話をくれたのだろう。

寺田が、私を一瞥して聞いた。

「ところであなた、今月もちゃんと生理はあったんでしょうね」

「はい」

私は答える。

「証拠が必要ですか？」

副園長室を出た後、身体が震えていた。

私は壁に寄りかかってきつく眼を閉じた。

すっかりしなくては。

私を迎えに来るために必死に頑張ってくれている陸人に心配をかけてはならない。

見回りの寺田が私の部屋から歩き去る足音が完全に消えた後、真つ暗な部屋のベッドの中で静かに身体を起こし、服を着替えようとそつとベッドの外に起き出した。

ボタンに手をかけると、小さく囁く声が聞こえる。

「愛美姉ちゃん」

二段ベッドの上で小さな女の子の影が動いた。

「優花ちゃん、まだ起きてたの？」

施設では年長者は年齢の低い子どもと同室になることが決まっている。

私は少女達の中では一番の年長で、優花は四ヶ月ほど前に施設に入ってきた、まだ六歳の一番小さな少女だった。

「うん。遅かったね、お姉ちゃん」

暗闇に目が慣れてきて、女の子の切りそろえた髪と利発そうな可愛らしい顔が見える。

「眠れないの？」

私がベッドの上段を覗き込むと女の子は布団の上に起き上がって、しょんぼりとうつぶむいたままこくと頷いた。

「じゃあ、お姉ちゃんと一緒に寝ようか」

私がそう言うと、少女の顔が嬉しそうにぱつと輝いた。

狭いベッドの中で、年よりも随分小さく華奢な少女の身体を背中から抱きしめる。

「愛美姉ちゃん、まだ病気なの？」

小さな子特有のストレートさで、優花が不安そうに私に聞いた。

「ずつつと病院から帰って来なかったから、もう戻って来ないかと思って、優花泣いちゃった」

そう言う声も涙声になっている。

優花は施設の中では一言も口をきかず、いつも私の隣に座ってずっと服の端を握り締めていて、私と二人になった時だけこうして小さな声で話をする。

優花の母親は、育児ノイローゼを理由に娘に虐待を繰り返した。

母親がアパートに戻っていないのを児童相談所が知ったのは、少女が置き去りにされてから二週間を過ぎた時だった。

少女は母が家に帰って来ないことを誰にも言わず、残された少ないお金でパンを買い、夜は鍵を閉めて眠っていたのだという。

小さな手には、タバコを押し付けられた火傷の跡がいくつもあつた。それでも少女は母親との数少ない楽しい思い出だけを何度も何度も

も私に語るのだった。

生まれた小さな子どもに優しい花と名づけた時、母親はどんな気持ちだったのだろうか。

幼い少女のまだ柔らかな髪を撫でながら私は言った。

「大丈夫よ。病気もすっかり治ったの。それに、ここには優花ちゃんがいるものね」

私がそう言うと、少女は嬉しそうに身体をもぞもぞさせた。小さな優香の仕草は、いつも私の心を愛しさで一杯にする。

「王子様が迎えに来てくれるまでここにいますか？」

優花は私の手を取り、自分の頬にそっと押し当てて言った。

「そうね。王子様が来てくれるまで」

私は微笑んだ。

優花は私が囚われのお姫様なのだという空想が好きだ。大好きな絵本の挿絵と私がよく似ているらしい。

お姫様は暗く日の差さない塔の部屋で、王子の迎えを待っているのだ。

そしていつまでも幸せに暮らす二人。

優花は私の小さな頃と同じ様に、物語や空想で現実の辛さを補う。それは厳しい現実の中を生きて行くための本能なのかも知れない。

「お姉ちゃん、優花のママは迎えに来てくれるかな」

しばらくして、優花がぽつんと呟いた。

「……どうしたらいい子になれるの？」

「優花ちゃん……」

「いい子になりなさいってママはいつも言ってた。私が悪い子だから、ママは迎えに来てくれないの？」

「そんな事ない」

声を立てずに泣き始めた少女を私は強く抱きしめた。

「優花ちゃんはいいい子だもの。お母さんは忙しくて心が疲れていたの。優花ちゃんは何も悪くない……」

子どもをただ愛することがそれほど難しいのだろうか。

泣きながら眠ってしまった優花の身体が、冷たく冷えた私の身体を温めていく。

その体温を腕の中に感じながらいつの間にか眠りに付いた。

「経過は良好。顔色が少し悪いのはしかたないか。このままちゃんと身体を大事にしてくれよ」

二週間後の検診の時、結城医師がそう言って私に微笑んだ。生理が終わったばかりで、身体はだるかったが苦にはならなかった。

自分の中に溜め込んだものを定期的に押し流してくれている気がするからだ。

「今日はこのまま学校に行けるよ。あ、そうそう愛美に預かりものだ」

医師は診察室の大きな机の引き出しから一冊の本を取り出して私に手渡した。

それはベストセラーの恋愛小説だった。少年と、夫のいる年上の女性の恋。

「この間、愛美に伝言を頼んだあの男の子から。興味を持ってみたいだから渡して欲しいって」

「私に？」

「そう。俺を通してとはいえ、あいつが女の子にそんなことを言うのを見たのは初めてだ。まだ産着を着てベッドの上で虫みたいにごめいてる頃から知ってるんだけどね」

結城医師はそう言って笑った。

「俺の実家の二件隣の家の子なんだ。伶と同年で宏章っていう。華南サッカー部のキャプテンだよ」

「彼の事は弟さんから聞いてました。あの華南でキャプテンだなんてすごいですね。あの時、先生が来るまで私、ずっとあの人の隣に座っていたんです。気を使わせてしまったかなって思ってたんですけど」

「そうか。愛美みたいに可愛い子が隣に座ってちゃあ、あいつも本なんて読んでいられなかっただろうな。随分印象が深かったらしくて、愛美のことが気になってる様子だった」

私はその言葉に赤くなると、医師はわざと真面目な顔で言った。

「あいつの身内のことで、今日はここにいるんだ。愛美が診察でここに来るから自分で渡せてあいつに言ったんだけどね。」

愛美の診察が終わる予定時間をさりげなく言っていた。待合室で熊みたいにうろろしてる奴がいたら、それは間違いなく宏章だよ」

優しい目がいたずらっぽく笑っていた。

大勢の患者が座っている広い待合室に向かうと、結城医師の言った通り、中庭に面した側の大きな窓の前で、背の高い少年が落ち着かない表情でうろろしているのを見つけた。

いつものように黒いスポーツバッグを持っている。

私は浮かんだ笑みを押し殺しながら少年に近づき、声をかけた。

「こんにちは。霧島さん」

少年は硬い表情で振り返ると私の姿を認め、驚いて動きを止めた。それから、すぐに視線を逸らす。頬に少し赤みが差している。

「本、ありがとうございます。読んでみたいと思ってたんです。しばらくお借りしてもいいですか？」

「返さなくていい。俺はもう読んだから、やるよ」

少年はそれだけ言った。もうここから逃げ出したいような表情だ。

「今日は学校はお休みなんですか？」

「いや。ここの病棟の患者に用があって」

「この間の花束、女性が病室に持ち帰りました」

そう言うと、少年は驚いたように顔を上げて私を見た。警戒するように表情が強張る。

「何で知ってる？」

「あなたが花束を持ってその渡り廊下にいるのを見たんです。あなたが置いた花束は、綺麗な女性が拾いました。とても幸せそうな顔をして、花に顔を寄せて微笑んでましたよ」

しばらくして、少年は「そうか」と言った。

前髪が落ち、横から見ていると表情がよく見えないが、彼は少し

だけ身体の力を抜いたように見えた。

「花が好きな人なんだ。あんなふうになる前は、家の庭にいつも溢れるように花を咲かせてた。日に焼けるのも気にしないで、いつも庭に……」

少年は話し過ぎたと思ったのか、急にそこで言葉をつぐんだ。

「俺の名前をどうして知ってる？ 結城先生から聞いて？」

ようやく少年は私の顔を見た。

日に焼けた彼の顔は端整に整っていて、すっきりした二重の目が印象的だ。

やはり、どこかあの女性にいていると思う。

「いいえ。先生の弟さんの方から」

「伶？」

少年が怪訝そうに眉を寄せる。

「はい。あなたのバッグについていた名前を覚えていたので聞いたんです。結城さんは兄の友人で、兄の名前は蔵木陸人と言います。もしかして、華南中等部の時のサッカー部で一緒にしたか？」

「陸人の妹！ 全然似てないな。本当に？」

少年は驚いてそう言い、まじまじと私を見た。

少年の目には賞賛がはつきりと現れていて、私は赤くなって小さく頷いた。

「まさか、あいつの妹がこんなに……」

そう言いかけて、少年がはっとしたように口をつぐむ。
その目にだんだんと皮肉な光が帯びてきた。

「あいつの妹か。じゃあ日向だろ」

軽蔑したように少年が言った途端、ショックで胸がズキンと痛んだ。

少年の反応は特別ではない。

今までも見慣れているものだ。

結城が優しく接してくれていたから自分の立場を忘れていた。

華南に通っているような家柄の少年に、私が話しかけるなんて身の程知らずだ。

「……そうです」

そう言うのがやっとだった。

「話かけてしまっでごめんなさい。お礼を言いたかったものだから」

少年のたったこれだけの言葉で泣きそうになっている自分に驚き、すぐに身体を翻すと、私は顔を見られないようにうつむいて出口の方向へ歩きだした。

「待ってくれ」

すぐに少年が後を追ってきて、足早に歩く私の横に並ぶと慌てたように言った。

「ごめん。変な言い方だったな。条件反射で……」

「条件反射であんな表情が出るほど軽蔑してるってことですね」

涙をすばやく指先で拭う。

今まで何度も同じように蔑まれてきたのに、私は今さら何を気にしているのだろう。

どんなことを言われても、誰かにこんなふうに言い返したことは今までまったくなかったのだ。

「違うよ。お前の兄貴の名前に対しての条件反射だ」

もつと腹が立った。

涙が溢れてきてどうにもならなくなり、私は立ち止まって両手で顔を覆うとそのまま泣き出した。

こんなたわいのないことで泣くなんて。

今まで私が我慢してきたことはいったい何だったというのだろう。

「というか、お前の兄貴を軽蔑してるってことじゃなくて……。ああ、つまり、やっかんでいるんだよ、お前の兄貴のサッカーの才能を。陸人を見ていると自分の限界を嫌という程思い知らされるから」

少年はそこまで一気に言った後、しばらく言葉を切ってから、心底すまなそうに言葉をつないだ。

「最低だな、俺。あいつに敵わないからいつもあんな言葉で溜飲を下げようとしてた。負け犬なんだよ。素直に認めるから許してくれないか」

謝ることに慣れていないのか、言葉を懸命に探し出しているのがわかる。

「俺はどうも言葉の選び方を知らないんだ。言うべきことが言えないのに、言わないでいいことだけ口から出ては後悔する」

ハンカチを取り出して涙を拭き、少年を見上げると、彼はまるでしかられた犬のようにしょんぼりとしていた。

私達の回りを通っていく人が何事かと興味本位に振り返っているが、彼は肩に下げたバッグに入っている自分のネームさえ隠そうとしない。

確かに考えないうちから言葉だけが先に出てきてしまうタイプなのかもしれない。

少しずつ気持が治まって来て、ようやく最後の涙を拭き終えた。

「私こそ突然泣き出して驚かせてごめんなさい。いつもはこんなことで泣かないんです。だからもう気にしないで」

少年がなんだか可哀想になり、私は彼を見てそう言った。

「あなたは華南のサッカー部のキャプテンだって結城先生から聞きました。それだけの力がある人が負け犬のはずありません。兄はいつも華南の選手の凄さに感心していました」

少年はそれを聞いて少しほっとした顔で私を見た。

「いや、正直な気持だよ。どうもあいつに関しては必要以上にむきになってしまう。けど俺、初めて話した子に何言ってるんだろうな。こんなこと今まで絶対に口に出さなかったのに」

「私も陸人以外の人の前で泣いたのは初めてです」

「お互い随分意地っ張りなんだな」

少年はそう言って少し笑った。

とたんに、近寄りがたいところのある彼の雰囲気や和らぐ。

「お前、名前は？」

「愛美。蔵木愛美です。エミ。愛する、美しい」

「ふーん。似合ってるかもな。その名前」

少年は私の名前を口の中で小さく呟いた後、照れたようにぼそつとそう言った。

私たちはその後、病院の前にあるバス停のベンチに腰かけ、二人でずっとバスを待っていた。

宏章はベンチの背もたれに身体を預けて足を投げ出していて、私も白い雲がゆったりとよぎる青い空を見上げていた。

何本も何本もバスが止まり、発車していくのに宏章は席を立つとしない。

「どこへ行くバスを待ってるんですか？」

私が聞くと宏章は言った。

「華南学院前」

「学院前。もう二回くらい通りましたけど」

「まあな。お前はどこ行くんだよ？」

「……今西」

「今行ったバスがそうだよな」

私は赤面して頷いた。

しばらくしてから宏章は言った。

「天気もいいし。このまま学校フケるか。近くに陸上競技場がある。」

そこの芝生で昼寝でもしようぜ」

初めて入った広い陸上競技場はきちんと整備されていて、階段状になっている応援席の反対側には大きな時計台があり、その回りはなだらかな傾斜のある手入れの行き届いた芝生になっていた。

後ろの道路を挟んだ所にある大きな公園の噴水の回りでは、小さな子どもたちとのんびり遊んでいる母親の姿が見える。

まだお昼まで少し間があるこの時間帯は、母子の姿が多いようだ。風船を売っている出店の前では、子どもがねだった風船を手にした途端に空へ飛ばしてしまい、泣き出した子どもを母親がなだめている。

泣き止んだ子どもはじきに風船を忘れて元気に走り出した。

この公園一帯には春になると見事な桜が咲く。

今年の春、初めて陸人に連れてきてもらった時にはあまりの美しさに息を呑んだ。

もう花びらが散る頃だったが、春特有の強い風が吹くたびに花吹雪が一斉に舞う様子が今でもはっきり目に浮かぶ。

上を見上げて、道を見ても、そこは一面に桜の花びらで埋め尽くされていた。

「ここは幼稚舎の頃入っていたサッカークラブの練習でよく来たんだ」

宏章は芝生に腰を下ろして着ていたジャケットを脱ぐと、芝生の上に引いて、私にそこに座れと指差した。

「お前、芝生に直接座るだけで風邪引きそうな顔してるもんな」

陸上競技場の中央の芝生のフィールドの上では、何人かの学生が

思い思いにストレッチをしたり、槍投げの練習をしている。

私はまだ宏章の身体のぬくもりが残るジャケットの上に腰を下ろし、足を伸ばした。

すこしひんやりとした芝生が素足に触れて気持ちがいい。

「この競技場に入るのは初めてだけど、後ろの公園にはこの春陸人と一緒に来たんです。桜の花が散る頃だったけど、本当に綺麗だった……」

「確かにこの桜並木は凄いやな。あの公園のベンチに座ってずっと降って来る花びらを見上げてると、空だか地面だかわからなくなる。子どもの頃はそれをやってよく目を回したよ」

クスツと笑って私は言った。

「それ、やってみたいな。花びらに囲まれてふんわり浮いてる感じになるのね……」

「浮いてると言うか、変な感じだよ。一度試してみるよ。そういやお前、陸人を兄さんって呼ばないんだな。兄妹ってそうなのか？俺は一人っ子だからわからないけど」

宏章の言葉にドキツとして身体が強張った。

「小さい時にあまり一緒にいなかったから」

私はそう言って、平静を装おうと制服のスカートの襞を直した。

「父が違うんです。私は六年生まで母と暮らしてて、陸人は小さな

頃からずっと施設に」

「あいつ、自分のことは何も話さないからそんなに昔から施設にいたなんて知らなかった。まあ、あのサッカー部の雰囲気じゃ、自分のことを話そうなんて思えなかっただろうけど……。わざわざ突っかかってく奴もいるし、俺みたいに意地でも口をきかない奴もいるから。」

際立ちすぎてたんだよ。他の部員が努力で補える範囲をはるかに突き抜けてた。ねたみを持たずにいるのは至難の業だよ。多分、あいつが普通に口を利いていたのは伶だけじゃないかな」

宏章は考え込むように言った。

「もちろん、妹がいるなんて口に出したことはなかったけど、正直お前を見て

たら理由の一つはわかる気がするよ。華南のサッカー部なんてナンパ野郎ばかりだからな。お前みたいな妹連れてきた日には心配で練習どころじゃないだろう。まさかあいつにこんな美人の妹がいるなんて」

「華南の人が私に興味を持つなんてありえませんか」

私は足の上に腕を伸ばしながら言った。

学校をサボったのは初めてだった。

中学では施設から通っているという事情もあって親しい友達を作ることはできなかったし、母の恋人とのことが会って以来、小学校の頃の友達とも疎遠になり、たまにくれる手紙にも返事を出さなくなつた。

教室ではいつも孤独だったが、それでも体調を崩していない時は毎日学校に通っている。

規則を守らずにいると不安で落ち着かなくなるのだ。だが、今は開放感で満たされている。

「さつきは本当にごめん」

宏章が少し慌てている。

一見プライドが高そうで近寄りたいが、こうして離してみるとなんだか可愛い人だなと思った。

育ちがよいのだろう。

施設にいる少年達のようなヒリつきは、彼からは感じられない。

「そんなつもりじゃないんです。それはもう気にしてません。それより霧島さん、小さな頃からずっとサッカー続けてきたの？」

「もう十二年だな」

「好きなんですね、サッカー」

「どうかな。そんなこと考えなかった。何かスポーツで一番になる必要があったから」

宏章は少し皮肉っぽい口調で言った。

「スポーツに限らず、何でも一番にならないと許さないんだよ。俺の親は。子どもの頃から、俺には親が他人に見栄を張るための道具以外の意味があつたためしがない」

「そんなことないと思います。それに、御両親が揃つてるだけでも幸せでしょう」

「いつそいないほうがましな親もいるんだよ。世間体を取り繕うためだけの仮面夫婦。一緒にいるのになんであんなに憎みあつてるのか俺には理解不能だね。物心ついた時からうちの親はお互いに目を見て話したことがない。」

俺は家の中では透明人間のように親から無視され続けてた。母親が、俺がいるのを思い出すのは痛烈に言葉の暴力を振るいたい時だけ」

宏章は淡々とそう言つと、芝生を干切つてぱらぱらと手から零した。

優しく吹く風が緑の葉先の切れ端をふわりと散らす。陸人と同じ、かすかな芝生の匂い。

「子どもの頃は毎晩父親の怒鳴り声と母親の泣き声が聞こえてた。あいつらの望み通り、俺がなんでも一番になれば少しは夫婦仲がよくなるんじゃないかって、馬鹿な俺は必死に努力したさ。」

でも、俺が何をどうしようがあいつらにはまったく関係ない。お袋は理由をつけては朝から晩まで外出しっぱなし。親父がこないだ数ヶ月ぶりに俺に話しかけた言葉は、宏章、お前スポーツは今何やつてるんだ？ サッカーは続けてるのか？ 何にせよ、将来のため

に記録に残る成績だけは上げておけ。俺は相変わらずの透明人間だよ」

「華南のキャプテンだってことも知らないなんて……」

両親が揃っていれば幸せなのだと漠然と考えていた私は、驚いて言った。

華南に通うような家柄の子どもが不幸せなはずがないのに。

「今更何も親に期待なんかしてないのに、俺の将来だけはレールを敷きたがる。大学は政経学部で、その後は政治家を目指せとさ。」

俺は高校も理数科だし、大学も理工を目指してる。俺の希望なんか聞かれもしないけどな。あんな偽善者の政治家の後を継ぐなんて、ふざけ過ぎて笑えもしない」

ポーカーフェイスを崩さないまま宏章は話した。

華南のサッカー部は強いことでも有名だが、ハードな練習と徹底した管理でも有名だった。

あの華南のサッカー部でキャプテンまで勤めながら、レベルの高い理数科でトップクラスの成績を保つために勉強し続けるのは並大抵ではないだろう。

けれど彼は、おそらく今でもそれを投げ出していないのだ。

「面白くもない話だよな。本当に俺、さっきからいったい何を前前に話してるんだろうな。会ったばかりなのに。」

普段は何にも話さないからつまらない男で有名だよ。伶とは正反対だ」

「いいの。聞いているの嫌じゃない。私も話すの苦手だから霧島さんと一緒なの。結城さんは相手の気持を察して話しかけてくれるもの

ね

何故彼といることを自分が好むのかわかる気がした。

この少年は陸人に似ているのだ。

彼も陸人のように、悲しみや辛い思いを口に出さず、胸に閉じ込めてしまったのかもしれない。

私達はそれからずっと、黙ってフィールドの上で練習をする人達を見ていた。

遠くに見えるカラフルなジャージを着た選手は、身体を慣らしているだけなのか、談笑しながらのんびりと練習している。

宏章は芝生の中に紛れ込んだように咲いている小さな花を摘むと、私が芝生に突いている手の近くにそつと落とした。

私が小さな白い花を取り上げ、それを耳の後ろに挿すと、宏章は後ろに深く肘をついて足を伸ばした姿勢ですつと私の横顔を見ていた。

「花が好きか？ さつきも桜の話を楽しそうにしてた」

「大好き。お花は綺麗なもの。困まれていると自分も少し綺麗になったように思える」

宏章の叔母も花が好きだと言っていたっけ。

けれどあの人が私と同じ理由で花が好きなのはない。

私は汚れているから、綺麗なものに触れていると、その時だけでも自分が浄化された様に思えるのだ。

「お前、自分を鏡で見たことない訳じゃないよな」

宏章が少し驚いて言った。

「鏡は嫌い……」

玖出も、鏡を見ることを好まなかったとぼんやり思い出す。

私は膝を見ながら小さな声でそう言つと、顔を上げて宏章に目を向けた。

あの人の病室には面会謝絶の札がかかっていたはずだ。

「ねえ、霧島さん、今日はあの人に会ってきたの？」

宏章は表情を曇らせた。

「いや。どうしても顔を合わせる勇気がない」

「でも、あの人は……」

顔を合わせても宏章だとわかるだろうか。

最後に見かけたときでさえ、現実のことはもう何もわからないように見えた。

「ああなる前に酷い言葉であの人を傷つけた。痛み止めが切れた時には時々ふと正気に戻るんだよ。昔のできごとを少し口にしたりする。俺を見てその時のことを思い出してしまったらと思うと……」

それから彼は起き上がり、足を腕で抱えようと、病院の渡り廊下で初めて彼を見た時と同じ、あの苦しげな表情でうつむいた。

「何を言ってしまったの？」

宏章はしばらく黙っていたが、ようやく言葉を口にした。

「売女つて。お前は汚い女だつて罵つたんだよ……」

私はただ宏章を見つめていた。

人は苦しみを口に出すことで少しでも救われるのを知っている。

「あの人が好きだった。子どもの頃からあの人だけが俺に心から優しく接してくれたんだ。」

年の差なんかどうでもよかった。血の繋がった叔母だってわかっ
ていても、気持が抑えられなくて……。

あの人の家族が事故にあって亡くなった時、葬式の夜に男と抱き
合っている姿を見てしまった。頭に血が上って、何も考えられなく
なっただけ。

あの人を引きずって無理やりベッドに押し倒した。今まであれほ
ど優しく接してくれていたのに、俺を激しく拒絶する。

俺には甥という立場を越えた、特別な気持ちを持ってくれている
ような気がしてた。実の叔母だから、俺はこの先もあの人を抱くこ
とができないって当たり前前事実を突きつけられて、嫉妬で心が荒
れ狂った。他の男には許してるんだ。

泣きながら抵抗されたショックで、気がついたら思いつく限りの
酷い言葉で罵ってた。お前はどうぞ誰にでもやらせる女だろ。家族
の葬式の夜に男と抱き合ってるくらい汚い女だからなっただけ……」

宏章は膝の上で組んだ両手に顔を伏せた。

「あの時の表情が忘れられない。あれほど傷ついた表情を見たこと
がない。あれからすぐに発病したんだ。きっと俺があんなことを言
ったから……」

「霧島さん……」

思わず宏章の背に手を触れていた。

家族に見放された絶望の中で、実の叔母を愛してしまった少年。

思い切って伸ばした手を振り払われた苦しみ、私には誰よりも
わかる。

自分が傷つけてしまった最愛の人が病魔に苦しむ姿を見、命を終
えようとする姿を見ていなければならぬ辛さはどれ程のものだろ
う。

宏章を抱きしめることしかできなかった。
頬を伝わる私の涙が宏章の肩に落ち、彼のシャツを濡らした。

「蔵木さん、さっきあなたにまたいつもの男の人から電話があったけど、取り次がなくてよかったのよね？ どちらにせよ、七時以降の私用電話は緊急の用以外は受け取らない決まりだから」

夕食の時、ほとんど会話もなく静まった食堂で、少女と小さな子ども達が座る方のテーブルにいた寺田がコーヒーを飲みながら言った。

今日は男性職員が休みで、園長は研究会に出席といういつもの理由で不在だった。

寺田がこの手の話を持ち出すのは、あまり自分の意見を言わない新人の職員しかいない時だけだ。

職員の間でも、常に何か派閥や抗争があるようだった。

寺田の言葉に、隣のテーブルにいる川崎が顔を上げ、私を見たのがわかる。

他の年長者達は、川崎と目を合わせて言いがかりをつけられないように、下を向いてひたすら食事を取っていた。

川崎がここに戻ってきたのは久々だ。何をしているのかはわからなかったが、あれ程私にしつこくまつわりついてきていた学校の教師が、まったく言い寄ってこなくなったのはありがたかった。

執拗に恐喝を繰り返しているのかもしれないが、あの教師の酷い行為を考えるととても同情はできない。

私はその頃高校進学を完全に諦めていたので、卑劣なやり方で脅されさえしなければ、教師が私の成績評価をどのように付けようと
もう関係はなかったのだ。

「言うまでもないけど、あなたたち皆にもういちど念を押しておくわね」

彼女は胃腸の不良を理由に私達と同じ食事は取らず、いつも別室で他の食事を食べるので、この時間にはこうして特別に入れた香りの強いコーヒーを飲むのが習慣だ。

「ここには六歳から十七歳まで、全部で二十五人が暮らしていますから、当然、団体生活のルールがあります。年長者は年少者のお手本になる生活態度を示す必要があるのです。

自分の年齢で、今一番何が必要かを考えなさい。あなた達が浅はかな考えで今欲しがっているものは、大人になれば嫌でも手に入るのです」

寺田は暗記している文章を朗読するように一息でそう言った後、刺すような視線を真っ直ぐ私に投げかけた。

「特に年齢不相応の男女交際は感心しません。規律の乱れはほとんどそこからくるのですからね。他の子ども達の風紀を乱す行動を取った場合は、きちんと将来を話し合う場を設けます。わかっていますね？」 蔵木さん

「はい」

私はそう答え、痛いほど感じている川崎の視線から逃れるように食事の皿に目を落とした。

あの日、私と宏章は彼の家で午後を過ごした。

宏章の家は高級住宅街の広い敷地に立つ、風格のある家だった。まるで一部屋かと思うほど広い玄関に足を踏み入れた時は、豪華さに圧倒されてしまい、宏章に手を引かれなければ逃げ出してしまったかもしれないと思うほどだった。

年代ものの見事な細工の家具や高価な調度品も素晴らしく、渡り廊下から見える美しい庭も完璧に手入れが行き届いていた。

いくら華南に通う生徒でも、これ程の家に住んでいる人はそうそういるとは思えない。

彼はおそらく、特に選ばれた家柄の少年なのだろう。

家には午前中に家政婦が来るだけで、多忙な両親はいつもほとんどいないのだと宏章は言った。

広いダイニングで家政婦が夕食用に作り置いてくれるのだという食事で昼食をとった。

「テーブルが広すぎてメガホン使わないとお話ができないくらいね」

複雑な細工が施され、顔が映るほど磨きこまれた大きなテーブルを挟んで前に座る宏章に、私はそう冗談を言って笑った。

「なんだか落ち着かない。隣の部屋にあった小さなテーブルで食べるのではだめ？」

さっき見た隣の部屋は家政婦さんが休む場所で、こじんまりとしたオークの丸テーブルに椅子が二つ付いていた。

「ああ、人がいないのに広すぎるだろ？ この家」

宏章がそう言っとうんざりしたように肩をすくめ、皿を持って立ち上がった。

「その案、いいな。移動しよう」

小さなテーブルを挟み、私達は隠れ家で遊ぶ子どものように楽しみながらおいしい料理をほおばった。

少し手を伸ばせば触れることができる程近くに宏章がいる。

少年とこんなに近くにいるのも緊張しないのが不思議だった。

宏章はテーブルの上に行儀悪く片肘を突き、手に顎を乗せてさっきからずっと私を見ている。

「お前さ……」

宏章があたしを見ながら独り言のように言う。

「お前みたいに綺麗な顔、華南でも見たことがない。年下だけど、すぐく、なんていうか。俺、一学年下の女子でもガキくさくて今まで興味なかったんだけど。ほんとに、マジでお前って」

宏章はそこで口をつぐんだ。

何度顔を上げてても目が合うから、しまいにおかしくて笑い出してしまう。

「霧島さん、食べないとまた冷めちゃうわ。温めなおしたばかりなの」

宏章は少し照れたように笑った。

「これが旨いなんて気がつかなかったよ。温める事さえどうでもよくなってる、いつも冷たい料理を適当に食べてたから」

宏章の言葉に私も笑って答えた。

「贅沢よ。私、こんなに手の込んだお料理今まで食べたことがないわ」

「こっちでこっちして食べるのはいいな。こっちして誰かと食べるとっ

まいもんなんだって驚いてるよ。子どもの頃から飯はいつもほとんど一人だったから。お前、料理は得意？」

「全然だめ。最低だと思っわ」

私は少し赤くなった。

「ちゃんとした食事を作る機会がなかったの。こういうの、特別な学校で習うの？ こんなふうにな上手に作れるようになりたいな」

たわいのないことだったが、自分がこの先何かを試してみたいと思いい、口に出したことに驚いていた。

そう、いつかちゃんと料理を習えたらどんなに楽しいだろう。

「学校なんか行かなくなつてすぐに上手くなりそうだけどな。なんかそんな気がする。もし何か作れるようになったら俺に食わせてくれよ」

宏章はそう言って私を見た。

今の彼は厳しい表情の時とは別人のように見える。

彼が私から目を離す様子がないので、私は顔を赤くしたまま頷いた。

「できたらお礼にそうしたいけど、たぶんだめかも。練習する場所がないのよ。施設には食堂があるだけで、私達が台所に立つことはないから」

「ここに来て練習したらいい。多分、何でもそろってるよ。クリスマスはどう？」

言ってから宏章は言葉を区切った。

「ごめん。勝手に話を進めてるな。俺の悪い癖だ。お前はその、何か予定がある？　というか、誰かと」

最後の言葉を言う時、少しだけ緊張した顔をした。
何か甘酸っぱい感情が胸に湧き上がる。

「ううん。予定はないわ。今まで一緒にクリスマスを過ごしたことがあるのは陸人だけよ。でも、今年は陸人も試合が入っているし、合宿もあるから」

「今まで誰とも？　じゃあ」

宏章の顔がぱつと輝いた。

「ごめんなさい。施設から出られないの。平日だもの。たとえ休日でも、許可がないとお休みも外には出られないのよ。特に女子には厳しい寮なの」

「でも、事前の許可があればいいんだろ？　俺と」

「だめなの」

宏章が勢い込んで言いかけた言葉を押しとどめた。
これ以上彼に近づいてはいけない。
肩を落とした宏章を見て言った。

「でもいつか料理が上手になったら、きっと霧島さんに食べてもら
うわ。約束する」

「別に、上手じゃなくてもいい」

宏章が呟いた。

日当たりのいい居間の低い出窓にクッションをたくさん置いて二人で埋もれるように座り、私達はたわいない話をしながら午後中そこで過ごした。

日差しがどんどん傾いていき、差し込む光の色がオレンジ色に変わる頃、私は立ち上がると言った。

「楽しかった。食事までいただいてしまっただけありがとうございます。そろそろ帰らないと」

私の前に立ってしばらく黙っていた彼が、思い切ったように私を見た。

「愛美、これからもまた二人で会わないか？ お前といるとなんか落ちつくんだ」

私は彼を見上げ、横に首を振った。

「いいえ。もうお会いすることはできません。霧島さんも理由はわかるはずですよ」

反論しかけた宏章の言葉を最後まで聞かないうちにもう一度首を振って、鞆手に取る。

送るといった宏章の申し出を断り、私はその大きな家を後にした。宏章といると心が落ち着いたが、住む世界が違いすぎる。

私と一緒にいるだけでも、彼の世界に属する人達は眉をひそめる
だろう。

夕暮れの血のような朱は、いつも私に自分が何なのかということ
を思い出させた。

その夜、施設に電話をかけて来た宏章の事を寺田に問い詰められた時、彼が誰であるかを始めて知った。

「衆院議員の霧島宏之の息子じゃないの」

沈黙した後で寺田は言った。

声がヒステリックに震えている。

「あなた、彼が有名な旧家の息子だって知ってるの？ 議員の中でもトップクラスの資産家じゃない。あちらのおうちの方はあなたのことを御存知なの？」

「いいえ」

私は驚いて言った。

宏章は代々続く有名な政治家一族の一人息子だった。

その家柄と際立った容姿のためにマスコミが注目し、何度も週刊誌が写真を掲載していたらしく、寺田は彼の顔をはつきり知っていた。

ほとんどテレビを見たことも、まして週刊誌を立ち読みしたこともない私が知るはずもない。

「彼の家のことは知りませんでした。でも、ご心配いただくような関係ではありませんし、もうお会いすることもありません」

「そう。では電話も一切取り次ぎませんよ。いいわね」

まだ怒りの目を向けながら、勝ち誇ったように寺田が言った。

そのまま十日が過ぎている。

寺田が「いつもの男の人」と言ったところを見ると、宏章はあれからも何回か電話をくれていたのだろうか。

コーヒーを飲み干した寺田が席を立ち、食事の時間が終わると、川崎が私に近寄ってきて肩に触れると低い声で言った。

「後で部屋に来いよ。あれ以来御無沙汰だからな」

他の少年や少女が押し黙ったまま横を通り過ぎてそれぞれの棟へと出て行き、殺風景な食堂は二人を残して空っぽになった。

「無理よ。今日も見回りは寺田先生なの。自分のベッドにいないと大変なことになる」

私は目を合わせないまま小声で囁いた。

「俺に抱かれないのは男ができたからだなんて言わねえよな。俺の女に手を出したらたとえ誰だろうと探し出して落とし前はきっちりつけるぜ」

川崎が、威嚇するようにゆっくりと言う。

私は顔を上げ、真っ直ぐに川崎を見た。

「彼は全然関係ない。言いがかりで手を出すには相手の家が強すぎるってことだけ忠告しておくわ。試す勇気があるならどうぞ」

そのまま横を通り過ぎようとした時、川崎が言った。

「お前の部屋を見せてもらっただぜ」

驚いて振り返る。川崎が手に持っているのは、私が施設に入る前からずっと綴っている日記だった。

「返して！」

川崎から日記をとろうと手を伸ばしたが、そのまま腕を掴んで強引に引き寄せられた。

「お前、陸人が好きなんだな」

全身が硬直し、心臓がドクドクと激しく鳴り出す。

何か言い返そうとしたが言葉が出ない。

日記には、誰にも言えない陸人への想いを書いていた。

そして、クロスのあの秘密も。

人に知られてはならない苦しさを、日記に綴ることで紛らそうと
していたのだ。

「ずっとおかしいと思ってたんだ。お前がなぜ玖出に抱かれなかつたのか、なんで陸人に知られるのをそんなに恐れてるのか。」

これを読んでやっとわかったよ。お前がやってきたことを知られない男に自分がどれだけ汚れてるか知られるのが怖いからだ。

お前は陸人を男として見てる。あいつに抱かれないから他の男を拒むんだ」

「違う………！」

私はやっとそれだけ言った。
身体が震えるのを抑えられない。

私は日記に陸人の名をはっきり記述していなかった。

川崎は張ったりで言っているのだ。

この男は恐喝のプロなのだから。

川崎は私を押さえつけたままニットを乱暴に捲くり上げ、胸元のクロスを引きずり出した。

残酷な笑みを浮かべながら私を見る。

「お前を初めて犯った男が掛けたのか。何度犯られた？ 数え切れないほどか？ 憎い男に抱かれながら、感じ始めてたんだろ？ だから、他の男に抱かれてもわざと反応しなかったんだ。」

本当のお前の姿を、このクロスが全部見てきたんだよな。お前が今まで何をしてきたか。お前がどんな女だか」

私の目の前で鎖を引き掴み、クロスを舌でゆっくり舐めあげた。
口から悲鳴が漏れそうになる。

これはお前の烙印だ。

母の恋人に犯されていた時の記憶が蘇り、身体が大きく震え始めた。

あれから何人も男に同じ卑劣な行為を繰り返されてきたのに、その最初の記憶はいつまでも恐怖の糸で私を呪縛し続ける。

私を逃がさないように片腕で抱きながら身体を触り始めた川崎から逃げることもすらできない。

「俺に抱かれないと言え」

川崎が耳元で囁く。

私は必死で首を横に振った。

「嫌」

頬に焼け付くような痛みを感じた。

「言えよ！」

川崎が力づくで胸に指を食い込ませる。

彼の燃える目に焼き尽くされてしまいそうだ。

「あなたになんか抱かれたくない」

逆上した川崎が何度も私を殴りつけた。

口の中に血の味がし、目の前が暗くなる。

助けて……誰か……。陸人……！

「畜生！」

言葉もなく震えているだけの私を、川崎は突然乱暴に突き放した。

「妹の目であいつを見ているんならこれは平気だよな？」

川崎は怒りで息を乱したまま床にうづくまる私を見た。

髪を掴んで顔を上向かせ、服の中に隠し持っていた写真を目の前に突き出す。

「調べたら随分いいところのお嬢様だ。華南のサッカー部のマネージャーだもんな。親が施設出の男との付き合いをどう思つか知りたいよな」

川崎の手にした写真には陸人が美しい少女と一緒に写っていた。

陸人の浅黒い肌と、少女の白い肌。

何をしているかは一目でわかる。

私はぎゅっと眼を閉じた。

「もっといい写りのもあるぜ」

「やめて！」

私はよろけながら立ち上がり、笑い始めた川崎から逃げるように自分の部屋に逃げ込んだ。

ドアを閉めて寄りかかるとそのまま崩れるようにずると床に座り込む。

「やめて……」

陸人と少女の写真が払っても払っても脳裏に蘇り、私は震える両手で顔を抑えた。

悲鳴を上げてしまわないように息を殺す。

陸人が誰かを好きになるのは当然のことだ。

ああして誰かを抱くのも。

それでも知りたくはなかった。

陸人はあの腕で、私ではない他の少女を、他の……。

自分でも押さえられないほどの強烈な嫉妬が炎のように燃え上がり、私の身体を焼き焦がした。

私は誰よりも陸人を愛している。

あの少女よりも、他の誰よりも。

それなのにこの想いを伝えることはできない。

陸人の肌に手を触れることすらできないのだ。

「愛美姉ちゃん……」

二段ベッドの上から優花がかぼそい声で私を呼んだ。

優花は昨日から少し微熱があり、夕食は少しおかゆを食べただけでずっとこの部屋のベッドに休んでいたのだ。

「愛美姉ちゃん、お腹が痛い」

答えるべきなのはわかっていた。

優花は私以外と口をきくことができないのだから。

「お姉ちゃん……」

優花の声を背中に聞きながら、私は放心したように部屋を出た。

冷たい廊下を歩き、玄関の鍵を開ける。

陸人に会いたかった。

遠くからでも一目姿を見ることができれば。

ただ、それだけが心を支配していた。
陸人に会いたい。

どうやってここまで来たのかはわからない。

私は夜のグラウンドに辿り着くと、フェンスにつかまり、部屋の窓から漏れる明かりでぼんやりと照らし出された無人のコートを見つめた。

堪えていた涙が頬を伝わる。

苦しさと、心が引きちぎれてしまいそうだった。

一番近くにいながら、決して手を触れることができない兄。

想いを口にするこすらかなわれない相手。

私がこれほどに欲し、この先も決して見るこのできない陸人を、あの少女はやすやすと手に入れているのだ。

押し殺しても喉から声が漏れ、私は冷たいフェンスに額を付けたまま泣き出した。

「愛美……？　こんな時間にどうしてここに……」

後ろから声が聞こえる。

暗闇の中を振り返ると、涙で霞む目に背の高い少年の姿が見えた。

陸人……！

私は抱きつき、声を上げて泣き始めた。

おずおずと私に回した少年の手に、次第に力が籠って来るのを感じる。

「会いたかったの。せめて姿を見たくて……」

涙で言葉が続けられなかった。

少年はついに私を強く抱きしめ、頬を寄せた。微かに震えるため息を漏らす。

まるで私を抱くのを堪えているように。

「抱いて……」

私は少年の胸に顔をうずめ、シャツにしがみ付いて泣きじゃくりながら言った。

「抱いて欲しいの。お願い。一度でいい。どれだけ軽蔑されてもかまわない」

胸を焼き焦がす思いが、堰を切って溢れた。

私は汚れ切っているのだ。

これ以上落ちたところで何もなくすものなどない。

「愛美。何があった？」

少年がうつむいていた私の顔を指で撫で、上を向かせる。

端正な顔立ちと印象的な目。

「霧島さん……！」

それは宏章だった。

私は知らずに華南のグラウンドに来ていたのだ。

陸人がここにいた頃、何度も様子を遠くから眺めに来ていた華南学院のコート。

驚いて身体を離そうとしたが、宏章の力強い腕から逃れることはできなかった。

「誰に抱かれないんだ。何をそれほど苦しんで……」

何も答えることができず、無力感でただ声もなく泣いていた。

「愛美」

宏章が反応のない私の頬に手を触れた。

顔を俯け、そつと唇を重ねる。

「俺じゃだめか？」

立ちつくしたまま、ただ宏章の腕に抱かれていた。

「あれからずっと再会を願ってた。本当の愛がどんなものだとか、正直言っただけ俺にはまだわからない。だけどあの日みたいに、お前と

近くにいられたらいいと思う。

もつと笑っているところを見たいんだ。こんなに辛そうな表情じゃなく」

宏章の目を見上げると、彼は私を強く抱きしめた。

「俺はお前を泣かせないから……」

そう言つと宏章は、もう一度私に唇を重ねた。

今度は、深く。

それは少しずつ激しさを増していく。

彼の暖かな舌が私の唇を辛抱強く押し開き、舌を絡め取った時、私の身体の中に不思議な情熱の炎がともった。

今まで感じたことのない押し流されるような強い激情。

気がつくとも夢中で舌を絡めていた。

息を切らしてようやく唇を離すと、上向いた私の頬から首筋を宏章のキスが伝う。

私を抱きしめる宏章の背中に強く腕を回した。

明かりを消した広い部室の大きなソファの上で、わたしと宏章は貪るように愛し合った。

目で見えるものではなく、身体で全てを知りたかった。

素肌で抱きしめあう感覚。

まるで今までの餓えを充たそうとでもするように、激しくお互いを求め合う。

わたしはその夜、自分が恐れから封印していたものを解きはなつた。

宏章の熱を帯びた身体に自分を預け、支配する感覚に身を任せる。

抑えきれず、喉から漏れる息。

熱く溶け合いながら、お互いに腕を回し、キスを交わす。汗ばむ肌と、押し寄せる波に振り返る身体。

宏章が私の身体を押さえ、より深く身体を沈めてくる。

高まりを堪えることはなかった。

私は宏章の腕の中で、初めて自分の身体を振るわせるほどの快感を知った。

幼い頃から見ていた母の姿が脳裏によぎる。

あいつの娘だから、その血が流れてるのさ。

母もこうして、自分の生を確認していたのだろうか。

私が今生きてここにいることを教えてくれる、宏章の身体。強い快感は、生と死の間にあるような気がした。

暗闇の中で私を抱く腕は宏章であり、口には出せない想いを持つ相手でもあった。

そして、宏章も。

彼は私を抱き、愛しい人を抱いたのだ。

「……あの人は亡くなったよ。昨日が葬儀だった」

夜の闇が白々と明けていく頃、私は宏章の腕に抱かれたまま、あの女性がまだ若い命を終えたことを知った。

部室の窓から差し込む微かな朝の光が私達を照らし始めた時、寝そべったまま片肘を突いて私をずっと見ていた宏章が聞いた。

「これは、お守り？」

その目が私の胸にかかるクロスを見ている。

早朝の空気は驚くほど冷たかったが、薄いブランケット一枚でも震えずにすむのは宏章の身体の熱さのせいだ。

あの華南のサッカー部の主力選手なのだから当然なのだろうが、背の高い彼の身体はすでに青年と違っていいほど完成されていて、激しいスポーツを続けているために傍にいただけで熱を感じる程暖かい。

「どっつしてそう思うの……？」

その言葉にドキツとして、私を覗き込んでいる宏章の顔を見上げる。

宏章は片手で私の肌に触れ、そのまま指先をクロスに移すとゆっくりと撫でた。

「男物の重くて大きなシルバーのクロスは愛美に似合わない。つけている理由がお守りだったらいいと思っただからさ」

宏章がクロスを指で掴んだまま、私の反応を確認するように顔を見つめている。

聡明な黒い瞳が私の心に隠し持ったものを探り出してしまう気が

する。

「抱いてる間中ずっと気になってた。これをつけている愛美は他の誰かのもののように見える」

そんなことを言われたのは初めてだった。

まるでこのクロスの秘密を知られているようで、知らずに身体が緊張する。

「俺が外していい？」

宏章が私の目を間近から見つめて言った。

自分では決して外せないクロスを彼が今外してくれると言っているのだ。

「もう行かないと」

私は長い髪で自分の表情を隠すように起き上がると、宏章の腕を外した。

クロスを外すことが恐ろしかった。

外してはいけないとあの男は言った。

宏章から離れた途端に冷たい空気が私の身体を取り巻く。

宏章は同じ姿勢で寝転んだまましばらく黙っていたが、やがて起き上がると言った。

「ロッカーから俺のジャンパー持ってくるよ。愛美が着ていた服じやあ寒そうだ」

薄いニットとスカートだけで出て来ていた私に、身支度を終えた

宏章が華南の紋章が付いた大きな白いジャンパーを着せ掛けてくれた。

「きっちり閉めたほうが暖かいだろ」

宏章は胸まで私が上げたジッパーを、さらに首元まで引き上げた。クロスは宏章のジャンパーに覆われて姿を消した。

夜が明けたばかりの華南学院の敷地内には人影がなく、辺りはひっそりと静まっている。

グレーのトーンの朝の光が並木の紅葉を照らす中を、宏章と手を繋いで歩いた。

「グラウンドが気になる？」

宏章に言われて自分がグラウンドの中に目をやっていた事に気がついた。

陸人はいつもここでボールを蹴っていた。

「ううん」

私は慌てて首を振り、上手く言葉を繋げなくなって沈黙した。私を見つめていた宏章が、硬い表情で唇を結び、私の手を強く握る。

彼は足を速め、私達はそのまま無言でコート横を通り過ぎた。

広い構内の周りを張り巡らした高い煉瓦の塀に通用門がある。それを押して出たところにバス停があった。

コートの横からここに着くまで無言だった宏章が急に足を止め、

私をいきなり抱きしめると強くキスをした。

いつまでも終わらない長いキス。

私たちの横を犬の散歩をしている人が歩調を緩めて通り過ぎて行くのがわかる。

「……このまま二人でどこかへ行こうか。誰も俺達を知らない遠いところに」

ようやく私の唇を開放して宏章がそう言い、答えるまもなくすぐにキスを繰り返す。

私は宏章に抱きしめられながら、それもいいかもしれないとぼんやり考えた。

誰も知らないところへ行ったら、何もかも忘れてもう一度新しい気持ちでやり直せるだろうか。

朝まで愛し合った余韻で身体も頭もまだだるく、現実と思うほど辛いのだとすら思っていた。

一人では逃れられないものからも、二人なら立ち向かっていける気がした。

宏章の身体は温かく、キスをしながら彼が頬に触れるその指先から、彼の体温が私の身体に流れてくるようだ。

そこで何も起こらなければ、おそらく私達は行く先のわからないバスを乗り継ぎ、自分達を縛りつけているものから逃げ出していたのかもしれない。

車が止まった気配は感じていた。

連続でカメラのシャッターを切る音で、初めて自分たちが撮られている事に気がついた。

驚いて顔を上げると、目の前の道端に止めた車の前に、無精ひげで目つきの悪い中年男が二人立っていた。

眼鏡を掛けたもう片方の男はまださかんにシャッターを切っている。

何が起こったのか理解できず、宏章の横顔を見上げた。

怒りで顔色を変えた宏章が私を離して立ち上がり、男達の前につかつかと歩み寄る。

「何の権利があつて写真を撮った」

二人の男よりもずっと背の高い宏章は、怒りに燃える目で二人を見下ろした。

「カメラをよこせ」

「何の権利つて、君が霧島家の大切な御曹司だから、興味がある人たちに情報を提供する仕事をしているだけさ。こんな朝早くから、俺達だつてお邪魔はしたくないんだけどね。フリーのライターやカメラマンには厳しい御時世でね。」

君の親父さん絡みのニュースはこの不景気の中、そこそこの値段で売れるんだよ。特に大人気の容姿端麗な息子の自堕落な生活はスキャンダル好きの主婦に歓迎される」

それから男は私を見て言った。

「おやおや。これはまた特別に可愛らしいお嬢さんだ。御曹司の嫁さん候補かただの慰み者か。どちらにせよ、美少女つて肩書きは世

間が大好きな言葉なんだよ。評判のよくない施設にいる奔放な女の子だって、その子の後を追って情報をくれた若者は言ってたけどね」

川崎が情報を買ったのだ。

止める間もなく宏章は男に掴みかかっていた。

「今の言葉を取り消せ！」

宏章が力任せに男の胸倉を掴んだ。

「怒るってことは、本当なんだね。君もほんのさっきまでいいことしてたんだろ？ 羨ましいよ。俺にもその子を紹介してもらえるかな」

「ふざけるな！ 糞野郎！」

「やめて！ 宏章さん！」

男に殴りかかりそうな宏章に駆け寄り、必死で身体を押さえた。もう一人がさらにシャッターを切っている。わざと挑発したのだ。

「なぜ俺をつけ回す！ どれだけ撮ったら気が済むんだ！」

乱闘が起こりそうな気配に、犬の散歩で通りがかった老婦人が怯えて悲鳴を上げた。

チワワがけたたましく吠える。

「通報されるぞ、霧島くん」

その声で一瞬力を抜いた宏章の拘束から男は身をよじって逃れ、すでにエンジンをかけて待っているカメラマンの車に乗り込んだ。

「カメラをよこせて言ってるだろ！」

男を追いかけ、ドアから引きずり下ろそうとしている宏章に私は哀願した。

「もうやめて、宏章さん！ お願い」

車が走り去った後、怒りが収まらず、まだ肩で息をしている宏章の腕を取った。

「落ち着いて。ね？」

「絶対何かある。ここずっとこんな写真を撮られてるんだ。なのにどこにも奴らが取った写真も記事も出ない」

宏章はイラついたように車が走り去った方向を見た。

「未成年だもの。そんなに酷い載せ方をされるはずがない。私が言われたことなら平気。もし写真が出てご両親に問い詰められたら、名前も知らない子に誘われたって言えばいいわ」

「愛美」

宏章が強い視線で私を見た。

「俺をそこまでの屑野郎にしないでくれ。それじゃまるで遊びみたいだ。愛美のことをこれからも親に隠す気はないよ。俺が誰と付き

合おつとあいつらに何の関係があるんだ」

「関係あるに決まってる。付き合うなんて無理よ。だって私は」

「関係ない。まさか二度と俺と会わないって言うつもりはないよな？」

宏章は黙ったままの私を見て、強い口調で続けた。

「それとも俺は一晩だけの誰かの身代わりで終わりかよ！」

宏章はそこで沈黙し、何も言えずに立っている私から目を逸らしてようやく言った。

「大通りでタクシーを拾って、それで帰ろう。日向園まで送ってくよ」

タクシーの後部座席に身体を持たせた宏章は、厳しい表情で前を見つめたまま一言も話さなかった。

私は宏章に触れないよう窓側に身体をつけるように座り、窓の外を流れる街の景色をずっと見ていた。

宏章は一時的な情熱に流されているのだ。

私達が付き合うことなどできるわけがない。

二人で遠くに行けるはずはなかったのだ。

私がいなくなっても誰も気にはしないが、宏章が姿を消すなどということは不可能だ。

誰も彼を見ている。

彼はそういう世界に生まれている特別な人なのだ。

施設の近くの道に車が止まると、私に続いて宏章がタクシーを降りてきたので驚いた。

「宏章さん」

「俺が何度電話しても取り次がなかった意地悪ババアに朝帰りの理由を説明する奴が必要だろ」

「でも」

「何か文句を言い出すようなら親父の名前をちらつかせるよ。クソ親父だけど教育関係に力がある」

宏章は私の手を取り、そのまま歩き出した。

「手を繋いで入るなんてダメよ。お願い。離して、宏章さん……」

だが私の怯えは、もっと恐ろしい事態で全て吹き飛ばされた。

道の角を曲がると施設の前に救急車が止まり、施設の子どもたちが遠巻きに集まっているのが見えた。

胸騒ぎで全身が粟立つ。

優花。

優花はあれからどうしただろう。

私は施設へと走り出した。

「優花ちゃん！」

悪い予感は当たっていた。

担架に乗せられた小さな少女の姿を見、恐怖で息を飲み込む。

優花の小さな顔は青黒く変色していて、息すらしていないように見えた。

「蔵木さん！ あなたどこ行ってたの！ ほんのさっきこんな状態だったってわかったのよ。この子が誰にも痛みを訴えないから」

寺田が真っ青な顔で取り乱している。

「どうしたの。優花ちゃん！」

動揺して何も考えられず、私は担架に取り縋った。

「愛美姉ちゃん」

優花が泣きながら私に囁いた。

「お腹が痛いよ。痛いよ……」

激痛のためか、優花はそう言ったきり眉をひそめ、きつく目を閉じた。

「ほら！ どいて！ 一刻を争うんだ！」

救命士が無線で連絡を取り合っている。

「急患です。年齢は六歳。強い腹痛と嘔吐。濃い茶色の吐しゃ物です」

日曜日の早朝に受け付けてくれる病院を探すのが困難な様子だった。

なかなか了承を得られない。

宏章がふらつきそうになった私を支えながら結城医師の病院の名前を言う。

「急患は必ず受けていますよね？」

救命士が頷き、すぐに連絡が取られた。

「少し遠いが、その辺の医者をつらい回しされるよりあそこへ行ったほうが確実だ」

宏章が私にそう言う声が遠く聞こえた。

不安に高鳴る心臓が、鼓膜に響く。

優花が私にお腹が痛いと言ったのは何時だっただろう。時間を数えてぞっとした。

私は何という浅はかだったのか。

苦しむ優花を放置してしまった。

私の他には誰にも話かけることができないこの子を。

「私も一緒に行きます。この子は私にしか口が聞けないんです」

寺田が頭を抱えてぶつぶつ言っている。

「だからこんな仕事は嫌だったのよ！ 評判が悪くても給料は変わらないし、園長は当直もしないし。断ればよかった。この子がもし死んでしまったら、管理責任はいつたい誰が」

「今、口に出す言葉じゃないでしょう」

宏章が寺田をきつく睨みつけた。

こういふときの彼の表情はぞっとするほど冷たい。

「あなたの事情は後回しにしてください。本音をわざわざここで晒すつもりですか？ どんな発言をしたか全部俺が覚えておきますよ」

氷のような目で自分を見ている端整な顔の少年が誰かに気が付き、

寺田は沈黙した。

「連絡がつかしました。病院に向かいますから付き添いの方は乗って下さい」

「愛美、乗って」

宏章に背中を押されて救急車に乗り込んだ。

「結城先生に連絡しておく。あとで追うよ。しっかりしろ。この子が話せるのはお前だけなんだろう？」

私は震えながら、宏章の顔を見て頷いた。

ドアが閉まり、サイレンを鳴らして車が走り出す。

まるで時間が止まってしまったかのように救急車がのろのろ進んでいる気がした。

毛布の中の優花の小さな手を取り、必死で祈り続けた。

この子は何も悪いことはしていません。

どうか助けて下さい。どうか……。

病院の急患用の出入り口から、優花を乗せた担架が運び込まれる。

急患用の診療室に、まだ私服のままの結城医師が急いでドアを押して入ってきた。

真っ直ぐ優花に歩み寄ると、顔を見るなり厳しい表情で眉をひそめる。

看護師が優花の着ているトレーナーを手際よく押し上げると、すぐに触診をした。

「いつから腹痛を訴えてる？」

優花の傍で立ちすくんでいる私を見て医師が真剣な声で聞いた。

「昨日、夜の八時頃にはお腹が痛いと言っていました。二日くらい前から微熱があつて、食欲がないのも風邪のせいだと思つていたんです。一晚中私、出かけていて……。救急車が来ているのを見つけたのが今朝の六時前です」

「十時間以上か」

「我慢強い子なんです。もしかして、もっと前から状態がよくなかつたのかもしれない」

医師が少しお腹に触れただけで優花は痛がつて泣き声をあげた。

素人目にもはつきりわかるほど、お腹は異様な膨れ方をしている。

「優花ちゃん、ごめんね。痛いでしょう」

あまりの痛々しさと自責の念で涙が込み上げ、目の前が霞む。代われるものなら代わりたかった。この痛みは私が受けるべきものだ。

「すぐにオペの準備をしろ」

時計を確かめながら看護師に指示を出す。

「その間にこの子のCTを取ってくれ。すぐだ」

「わかりました」

看護師が優花の乗った移動ベッドを押して大急ぎで急患の診察室を出て行った。

「先生、優花ちゃんは……」

医師は私を見ると急いで言った。

「決している状態とは言えないが、全力を尽くすよ。知らせないといけない身内の方にすぐ連絡してください」

後の言葉は私の隣で立ち尽くしたままの寺田に向けたものだが、肝心の寺田酷く取り乱したままだ。

「まさか死んだりしませんよね？ 先生。園長不在の留守を預かっていたんです。もしこの子が死ぬ事にでもなったら私は」

寺田の言葉に無言のまま厳しい一瞥をくれると、医師は入ってきて

た入り口のドアを押し、すぐに歩いて出て行った。

「優花ちゃんのお母さんに連絡は取れますか？」

私は待合室側の入り口の傍の丸椅子に、脱力して腰を下ろした寺田に聞いた。

「多分無理だと思うわ」

寺田が投げやりな様子で答える。

「登録してある連絡先にはいくら連絡しても通じないのよ。携帯だったから、新しい番号に代えたまま放つてあるのね」

「住んでいる所が変わらなければ、連絡はつきますよね？」

「帰って調べてみるわ。園長からすぐに戻ると連絡があったから、それまで私はここに来れないかも知れないけど。当直の職員が今日は一人しかいないのよ。他の職員が出勤できるか連絡取らなくちゃならないし」

「お願いします」

手術はすぐに始まり、寺田は優花の母に連絡を取るために施設に引き返した。

私は手術室の前の長椅子に腰掛け、赤くともる手術中のランプを見ながら必死で祈っていた。

結城医師の緊迫した表情が頭をかすめ、恐ろしさに身体が強張る。優花の苦しみは相当のものだったに違いない。

なのに私は現実の辛さから逃れるために、その間ずっとああして
宏章に抱かれていたのだ。
服を握り締め、うつむいた。

「愛美……」

どのくらい時間がたったのか、顔を上げると真剣な表情をした宏
章がいた。

「あの子の容態は？」

「よくないの」

私は隣に座った宏章にようやくそれだけ言った。
痛みに顔をゆがめて泣いていた優花を思い出し、涙が滲む。

「あの子は私と同室だったの。施設を出る前にお腹が痛いつて訴え
られていたのに、自分のことで頭が一杯で、様子を見てあげずに部
屋を一晚空けてしまった。あんなに苦しい思いをさせて、その上も
し……」

恐ろしくてその先を続けることができない。

「それ程重い病気だなんて判断できなくてもしかたないだろ。体調
を崩し始めているのがわかっていながら、様子を見ずに放っておい
た職員がまず攻められるべきだ。お前にしか話ができない子だつた
らなおさらだよ」

宏章が私の肩を抱いた途端に、身体がビクツと震える。

その腕から逃れるように身体を離れた。

宏章の手ですら、今の私には怖かった。

私の身体には、何か恐ろしいものが潜んでいるような気がした。

「俺達のこととあの子の病気は関係ない。たまたまあの子に不運が重なったんだ。お前のせいじゃない」

「昨日の夜、部屋を空けてたことだけじゃないの」

私は震える両手で顔を覆った。

「あの子が痛みを訴えられなかった原因は私なのよ。他の誰かと話ができるように接してあげてれば……。あの子の味方は施設の中で私だけなんだって、そう思ってるのがわかってて否定しなかった。

優花ちゃんが私にしか話ができないのを、そのままにしておきたかったの。誰かに特別に必要とされているのが嬉しかった。私が生まれてきたことにも意味があるんだって思えたから……」

後悔で涙が止まらなかった。

拒絶されずに愛することができるとこんな欲していたのだと、初めて気がついた。

優花は愛に飢えていて、私は誰かを愛したかったのだ。

「愛美。責めるなら俺を責めろよ。俺がお前を帰さなかったんだ。たとえどんなに抵抗しても、絶対に朝まで帰さなかった。だからお前に落ち度はない」

何度も手術中のライトを見上げている私を、ついに抱き寄せて宏章は言った。

「そんなに思いつめたらお前のほうがどうにかなくなってしまふ。結城先生を信用しろよ。きっと上手くいくよ」

抱かれていると身体から力が抜けていく。
宏章は私の髪を撫で、囁いた。

「愛情を自分に向けたいと願うのは当たり前前の感情だろ。あの子だつてきつとお前に対してそう思ってたはずだ。

みんな同じなんだよ。誰にも無視され続けたら生きていけない。生まれたての赤ん坊ですら何もわからないのに笑ってみせるだろ？愛されるための本能がそうさせるんだって、叔母が生前そう言うてたことを覚えてる」

私は小さく頷くと、宏章にそのまま身体を預けた。

優花の母親の姿が見えないまま、手術は長時間に及んだ。

ようやく赤いランプが消え、手術室のドアが開く。

「優花ちゃん！」

はじかれるように立ち上がり、看護師が押すストレッチャーに乗せられて運び出された優花の小さな顔を覗き込む。

まるで息をしていないかのように、血の気がない肌色。

取り付けられたままの酸素マスクと細い腕に刺された点滴がなければ、生きていることすら信じられないほど痛々しい姿だった。

「先生……」

不安に駆られ、結城医師の顔を見ると、その表情は厳しいままだった。

思わしくない結果だったのだろうか。

優花はどうなってしまふのだろう。

動揺が激しく、握り締めた自分の手に爪が食い込んでいることに
も気がつかないほどだった。

「あの子の身内はまだ来ないのか？」

「はい。寺田先生がおうちの方に連絡してくださると施設に帰った
まま。お母さんの電話番号が変わっているんだそうです」

「そうか……」

「優花ちゃんの容態は悪いんですか？ 教えて下さい、先生」

医師は私のほうに向き直ると、真剣だが落ち着いた口調で言った。

「手術は成功してるよ。ただ、腸重積で壊死を起こしていた部分以
外にも、いくつかポリープがあつてね。」

あの年頃の子の腸重積には他の病気が潜んでいることが多いんだ
よ。切除しなくてはならない部分が予想以上に多かった。回復はあ
の子の体力次第だ」

私は言葉を失った。

「そんなに酷かったなんて……」

「今見つからなければ、もっと酷いことになってたよ。だから自分
を責めるんじゃない。わかつたね？」

あの子はしばらく眠っているから、愛美はゆっくり身体を休ませ
なさい。今にも倒れそうな顔色をしてるぞ」

「でも、優花ちゃんが目を覚ます時にいてあげたいんです」

「ここで今気を揉んでいてもどうにかなるわけじゃない。それより、また一人緊急の患者が増えたら俺が持たないよ。」

ああ、宏章、そんな目で見るな。俺はお前の大事な愛美を虐めてるんじゃないぞ」

「そんなつもりじゃ」

赤くなつた宏章を見ると、医師はようやく力を抜いた笑顔を見せた。

「まるで凶暴な用心棒だな。愛美を泣かせたら嘔み付かれそうだな。心配なら愛美を送ってってやれ。いいか？ まっすぐ送るんだぞ」

「施設にですか？」

宏章が私の手に指を絡ませ、きつく握っているのを見て、医師が頭を振って小さく笑う。

「主語を省いてるのにわざわざ聞き返すな。愛美が着てるお前のジヤンパーがよく似合うのは認めるが、未成年を前にいろいろ建前を言わなきゃならん大人の立場なんだよ。お前達がもう三年大人だったら喜んでからかってやりたいところだが、今の歳では二人で外泊には嚴重注意だ。」

まあ、今日は二人とも疲れてる様だから目をつぶってやる。お前も帰ったらとにかく寝とけよ、宏章」

宏章のネームが入ったジャンパーを着ていたことを思い出し、赤面した。

繋いでる手を離すタイミングがつかめない。

宏章は私の手を離す様子もなかった。

「俺は全然大丈夫です」

「自分の体力を過信するな。ここずっとろくに寝てないのに部活に出てたろ。そんなに酷い顔を見たのはお前が生まれてから初めてだ。あの子が目覚めたら誰かに連絡させるから、心配しないでいいよ、愛美。じゃあ、あとで」

医師が歩き去ったあと宏章の顔を改めて見ると、目の下につつすら影がある。

あの女性の葬儀は一昨日だったと言っていた。

ほんの数日前にこの病院で息を引き取ったのだ。

あのひとの最期に向き合って、毎日眠れずにいたのだろう。

辛い思いにずっと苦しんでいたのは宏章のほうだ。

結城先生に言われなければ、また優花の時と同じ過ちを繰り返すところだった。

宏章も陸人のように、自分の苦しみを人に見せることを嫌うのだ。

「大丈夫？　ここずっと眠ってないって……。それなのに、朝まで

一緒にいてくれたのね。ごめんなさい。私、自分のことばかり」

思わず宏章の頬に手を触れる。

「別に。寝不足くらいどうでもいい。俺の家に行こう。施設には戻せない」

「でも」

宏章がそう言って私の手を引いたまま歩き始めたとき、前方から聞きなれた声があった。

「愛美」

「陸人！」

廊下の向こうからこちらへ向かって歩いてくる背の高い影は陸人だった。

どうしてここに陸人がいるのだろう。

頭の中が一瞬真っ白になり、必死で自分を取り戻す。

私が一晩施設に戻らなかったことを知っているのだろうか。

宏章と朝まで過ごしていたことも？

「心配したよ、愛美。夜、副園長からお前が無断で出て行ったと電話が来て、一晩中探した」

陸人は私の着ているジャンパーを見、霧島と私が繋いでいる手に視線を走らせた。

「俺の妹から手を離せ、霧島」

陸人の声が強い怒りを含んでいる。

驚いて見上げると、陸人は燃えるような目で真っ直ぐに宏章を見据えていた。

いつも穏やかな陸人のこんな表情を見たことは、今までに一度もなかった。

「何でお前に指図されなきゃならない？」

宏章はそう言うと、陸人に挑戦するように私の肩を抱いた。

恐ろしくて陸人の表情を確かめることができない。

今の陸人は、触れた者を即座に焼き切ってしまうように見える。

兄の中にこれほど激しい気性が潜んでいたのだと始めて知り、衝撃を受けた。

「お前が連れ出したんだろう、霧島。愛美は今まで一度も無断で外泊したことはない。そうだな、愛美？」

落ち着いた声は今まで聞いたことがないほど恐ろしく、私ですら身体が震えてしまう。

これは本当に陸人なのだろうか。

「違うの、陸人。私が……。私が華南のグラウンドに……」

どうやって説明したらいいのだろう。

陸人を狂おしく求め、さまよってたどり着いたのだ。

真実を知られてはならない。

いつものように兄を慕う妹の振りをしなければ。

「ただ、グラウンドに行ってみたくて……」

遮るように宏章が言った。

「お前の妹だろうが、付き合いを指図される理由はない。愛美にだって自分の意思で行動する権利はあるはずだ。それとも、愛美はお前のものだともいうのか」

「俺のものじゃない。だが、俺の妹がお前にもて遊ばれる理由もない。愛美、来いよ。俺と一緒に帰ろう」

陸人が私の腕を強く掴む。焼け付いてしまいそうな程強く。途端に宏章が私の肩に回した腕にも力が籠った。

「離せよ、蔵木。結城先生から愛美を送って行けと言われてる」

「お前に愛美を預けるつもりはない。愛美、俺と帰るな？」

「どこへ返すつもりだ。施設に行くのか」

「お前と二人きりにするくらいなら、施設の方がましだ」

陸人と言い争う宏章の表情がどんどん冷たくなって来るのがわかる。

今の彼はさっきまでの宏章と別人のようだ。

氷のように詰めた表情で、端正な顔に薄く笑いすら浮かべながら、宏章はわざとゆっくり陸人に言った。

「いまさら二人きりになるのを止めてどうするんだ。ほんの数時間前まで一緒にいたんだぜ。一晩中抱き合ってた」

「ふざけるな！」

あつという間に陸人が宏章に掴みかかり、胸ぐら引き掴んで強く壁に押し付ける。

挑発するように宏章が続けた。

「お前もよく知ってる部室のあのソファだ。俺が求めるのと同じくらい、愛美も俺を求めてた」

「嘘をつけ！ 愛美がそんなことをするはずがない！」

燃える目で睨みつける陸人を、宏章は真っ直ぐに見返した。

「自分の妹は男を好きにならないとでも思ってるのか。誰かを好きになって苦しまないとも？ 自分の理想を愛美に押し付けるのはやめろ！」

「お前に愛美の何がわかる！」

「お前こそ、何もわかってないだろ！」

「やめて、陸人！ 宏章さん、お願い、もうそれ以上言わないで……」

殴り合いになりそうになった二人に取りすがった私の頬を、陸人が振り上げた手が擦った。

激痛で思わず手で頬を押さえる。

「愛美……」

陸人が驚いて私を見た。

「それでも施設に戻す気か」

宏章が力を落とした陸人の手を振り払って言った。

「愛美はずっと髪で頬を隠してた。結城先生もわかってたからあえて施設に戻せと言わなかったんだ。施設の誰かにやられたんだろ？
愛美」

言葉をなくしてただ立ち尽くす。

川崎に殴られた痕だった。

陸人が怒りで自分の手をきつく握り締めるのが見えた。

「愛美、誰にやられた？」

陸人の言葉に、私はただ首を振った。

「たいしたことじゃないの。ちょっとした争いに巻き込まれたのよ。報復しようなんて考えないで、陸人。もう少しの辛抱だもの。今何か事件を起こしたら、せつかく今まで耐えてきたものまで無になってしまう」

陸人のサッカーを絶対に犠牲にはしたくない。

宏章は黙ったままの陸人に言った。

「もて遊んでいるつもりはない。お前の妹だからってわざと手を出したわけでもない。愛美と、本気で付き合いたいと思ってる」

陸人が、宏章の真っ直ぐな視線から目をそらした。

自分を懸命に抑えようとしているのがわかる。

誰もいない病院の廊下に、宏章の声だけが静かに響いた。

「さつき施設を始めて見たよ。今日は職員が手薄なのだと聞いた。また同じことに巻き込まれるかも知れない。」

俺の家はここから近い。別の部屋で寝ると約束するから、愛美を早く休ませてやってくれ。酷い心労で疲れきってる。心配なら、お前もついて来ればいい」

陸人はしばらく黙っていたが、ようやく顔を上げて私に言った。

「愛美、お前は霧島と行きたいんだな？」

私の目を見つめる。

感情の波に激しく揺さぶられ、自分の気持ちがわからなかった。宏章に対する気持ちがいっただい何なのかも。

ただ、今は彼と一緒にいなければならぬ気がする。

私は頷いた。

「宏章さんと行くわ。ごめんなさい。陸人」

陸人の顔に浮かんだその表情。

この目を知っている。

母が陸人に施設に戻れと告げた、あの時の……。

宏章がいなければ、私は陸人に取りすがり、抱きしめていただろう。

私の肩に回された宏章の手が、まるで熱を持っているかのように熱く感じる。

「愛美」

宏章が低く囁いた。

「俺といてくれ」

見上げた宏章の横顔に胸を突かれた。

陸人と宏章は同じ傷で苦しんでいる。

彼らの孤独な魂はまるで合わせ鏡のようだった。

陸人が静かに言う。

「連れて行けよ。俺は戻らないとならないから。理由を言わずに寮を一晩抜けてきた。今日の練習には参加しないと特待生の立場が危うい」

霧島に頭を下げる。

「愛美を頼む。お前が本気なら、どうか愛美を守ってやってくれ」

「陸人……」

陸人は私のために一人になろうとしている。

「頭を上げるよ。別にお前のためにやるんじゃない。俺が持っているものを全部使って必ず愛美を守る」

宏章はそう言って私の手をしっかりと握った。

私が陸人に寄せる想いを宏章は知らないのだ。

そして、陸人も……。

「これだけは覚えておいてくれ。愛美を傷つけるようなことがあつ

たら絶対に許さない。絶対にだ」

陸人は去り際に、宏章を見つめてそう言った。
それは脳裏に焼きつく程、強い眼差しだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0395z/>

クロス

2011年12月5日23時55分発行